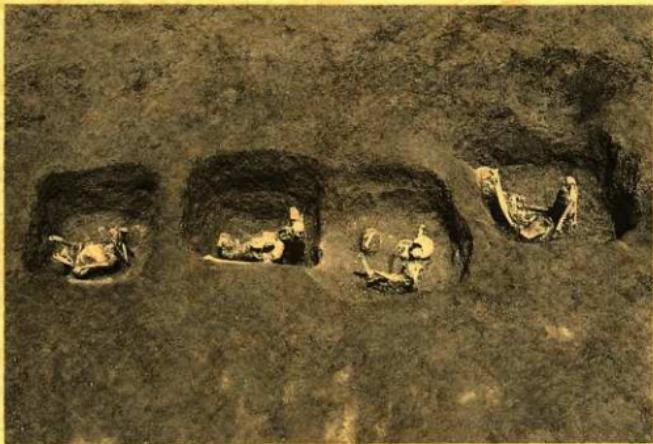


山 梨 県 大 月 市

安樂寺東遺跡

中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書



2000.3

山 梨 県 教 育 委 員 会
日本道路公団東京建設局

山梨県大月市

安楽寺東遺跡

中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書

2000.3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京建設局

序

大月市賑岡町強瀬に所在する安楽寺東遺跡は、この度日本道路公団による中央自動車道改築工事のため発掘調査されることになりました。

調査の結果、奈良・平安時代の溝2条、8基の近世・近代埋葬墓の存在などが明らかとなりました。

奈良・平安時代の溝は調査範囲が限られているためその一部が調査されたにすぎませんが、少なくとも6本の小溝が同じ場所に繰り返し掘られた結果残されたこと、またその内の何本かはほぼ直角に屈曲して調査範囲の外まで続くことなどが判明しました。この溝がどのような性格のものか残念ながら今のところ明らかではありませんが、道もしくは有力者の屋敷などを取り囲んでいる溝といった性格も考えられ、今後の進展に期待がかかります。

江戸時代後半から近代にかけての8基の墓からは、合計11体の人骨が出土しました。これらは付近に住む人達が、自身の所有する大事な畠の隅に家族を埋葬したものと見られます。今回の調査では、この地域で江戸時代の後半（18世紀頃）から始まり大正時代頃まで続いている、死者を木製方形棺（立棺）に座らせて葬る伝統的な埋葬方法について明らかにすることができました。

また人骨に対して形質人類学的な分析を行った結果、これらの被葬者はすべて大人の男性であることが判明し、畠に埋葬する人物は家族全員ではなく、戸主といった特定人物に限られていたことがわかりました。さらに人骨に対して、近年開発された炭素・窒素安定同位体比による食性分析を試みた結果、この地域での伝統的な食生活が穀類を中心とした植物食にあることが化学的にも明らかとなりました。

このように、この度の発掘調査では比較的最近のことでありながら、実はあまり記録に残されておらず、ここ数十年の間に急速に忘れられ、失われてしまった伝統文化について、具体的な検討を可能とする重要な記録を残すことができました。

この発掘調査にあたっては、日本道路公団、大月市関係者各位、地元の皆様など、多くの方から多大なご配慮・ご協力をいただきました。また連日の屋外作業に従事された地元作業員の皆様など、お世話になった多くの方に改めてお礼を申し上げたいと思います。

平成12年（2000年）3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　言

- 1 本書は、山梨県大月市藤岡町強漸889-1外に所在する、安楽寺東遺跡における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団による中央自動車道改築工事に先立って実施されたもので、調査期間は、平成10年（1998年）5月25日～8月19日である。
- 3 発掘調査は小林公治・古屋勝之（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）が行った。また本報告書の作成は小林が行ったが、野代幸和（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）、網倉邦生（山梨県埋蔵文化財センター嘱託）の助力を得た。なお、文末には執筆者名を記載した。
- 4 発掘調査および整理作業にあたっては、下記の各位・諸機関から多大なるご指導・ご協力をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

赤池智朗、清水溥、杉本正文、林陽一郎、福田正人、堀内真、三好美智
大月市教育委員会、小俣クリニック、山梨県史編纂室
- 5 発掘調査および報告書作成業は、雨宮一二三、石原沙織、伊藤順子、今泉久、小澤千夏子、加藤寿亜子、佐藤あさ子、佐藤美須子、清水真寿美、清水光子、志村君子、志村恵子、菅沼芳治、鈴木美智恵、鈴木八重子、高鳥はま子、中村九二、平井大三、松村恭子、渡辺麗子が従事した（敬称略・五十音順）。
- 6 調査範囲面積については、プラニメータ（TAMAYA Planix5000）を使用して測定した。
- 7 挿図で使用したスクリーントーンの凡例については必要に応じて図中に示した。また墓壇中のマークでは黒三角（▲）が釘、黒丸（●）はその他の金属製品を示している。また須恵器は断面を黒く塗りつぶして示した。
- 8 本発掘調査・報告書に関わる記録図面・写真・出土遺物は、山梨県埋蔵文化財センターに保管している。また出土人骨については国立科学博物館分館にて保管している。
- 9 出土石器の石材同定については帝京大学山梨文化財研究所河西学氏に依頼し、肉眼観察による同定結果を得た。
- 10 出土人骨の形質人類学的分析は国立科学博物館人類研究部梶ヶ山真里・馬場悠男氏に委託し、玉稿を賜った。
- 11 出土人骨の炭素・窒素同位体比法による食性分析については国立環境研究所化学環境部米田穎氏に依頼し、玉稿を賜った。
- 12 土層注記の色調表現については、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
- 13 挿図上における北は、すべて座標北を示している。
- 14 図示した遺構・遺物の縮尺は基本的に、溝1/100・1/60、土坑墓1/30、土坑1/40、遺構全体図1/500、縄文時代土器1/3、小形石器（搔器）2/3・大形石器（打斧・磨石等）1/3、古墳・奈良・平安時代土器1/4、金属製品1/2、古錢（鉄錢を含む）1/2、陶磁器類1/3で行った。
- 15 捣乱としたのは現代（太平洋戦争以後・昭和時代後半）に耕作等によって掘り込まれたと判断されたものである。
- 16 遺構番号は発掘調査時につけた番号を踏襲しているが、第16・17号土坑のみは調査時にピットとしていたものである。

本文目次

序	i
例 言	iii
本文目次	iv
挿図目次	v
挿表目次	v
写真目次	v
図版目次	v
第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の概要	1
第1項 調査の方法および遺跡の概要	1
第2項 安楽寺東遺跡の立地と周辺の遺跡	4
第2章 検出された遺構と遺物	5
第1節 縄文時代の遺物	5
(1) 土 器	5
(2) 石 器	5
第2節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物	6
第1項 溝	6
(1) 第1号溝	6
(2) 第2号溝	6
第2項 遺構外出土遺物	8
第3節 近世・近代の遺構と遺物	8
第1項 墓	8
(1) 第1～4号墓	8
(2) 第5～8号墓	12
第2項 土 坑	14
第3項 遺構外出土遺物	18
第3章 分 析	19
第1節 出土人骨の形質人類学的分析	19
第1項 緒 言	19
第2項 所 見	19
第3項 考 察	23
第2節 考古学データと民俗例に基づく埋葬方法の復元と変遷	24
第1項 埋葬方法の復元	24
第2項 山梨県東部地域における近世後半以降の埋葬方法の変遷	26
第3節 出土人骨の炭素・窒素同位体比法による食性分析	28
第1項 はじめに	28
第2項 試料と方法	28
第3項 結果と考察	28
第4項 結 語	30
第4章 まとめ	31
第1節 縄文時代	31
第2節 古墳・奈良・平安時代	31
第3節 近世・近代	31
引用文献	32

挿図目次

第1図 調査区割り設定図 (1/1,000)	1
第2図 安楽寺東遺跡遺構全体図 (1/500)	2
第3図 安楽寺東遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第4図 遺構外出土縄文土器	5
第5図 遺構外出土縄文石器	5
第6図 第1号溝平面図	7
第7図 第1号溝断面図	8
第8図 第2号溝平・断面図	9
第9図 古墳・奈良・平安時代土器・陶器	9
第10図 第1～4号墓平・断面図	10
第11図 第1～4号墓出土遺物	11
第12図 第5～8号墓平・断面図	13
第13図 第5～8号墓出土遺物	14
第14図 第1～8号土坑平・断面図	15
第15図 第9～13号土坑平・断面図	16
第16図 第14～17号土坑平・断面図	17
第17図 遺構外出土近世・近代陶磁器	18
第18図 第5～8号墓の埋葬状況復元図	27
第19図 コラーゲンの分析結果から復元した安楽寺東遺跡人の摂取したタンパク質における 炭素・窒素安定同位体比	28
第20図 C/N比と炭素同位体比(a)および窒素同位体比(b)の関係	29
第21図 安楽寺東遺跡人骨と長野県諏訪地方出土人骨の食性の同位体比における比較	30

挿表目次

第1表 安楽寺東遺跡周辺の遺跡	4
第2表 安楽寺東遺跡出土人骨のコラーゲンにおける窒素同位体比、窒素同位体比、 炭素含有量、窒素含有量、および元素数の炭素／窒素比	29

写真目次

写真1 安楽寺東遺跡出土人骨	23
----------------------	----

図版目次

図版表紙 遺跡遠景

図版1 第1号溝全景・第2号溝全景
図版2 第1～3号墓人骨出土状況・第5～8号墓人骨出土状況
図版3 第1号溝全景・第1号溝石敷検出状況・第2・3・5号墓個別写真
図版4 第6・7・8号墓個別写真・第1・5号土坑
図版5 第6・9・10・12・13・16・17号土坑、Ⅲ区全景
図版6 出土遺物

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

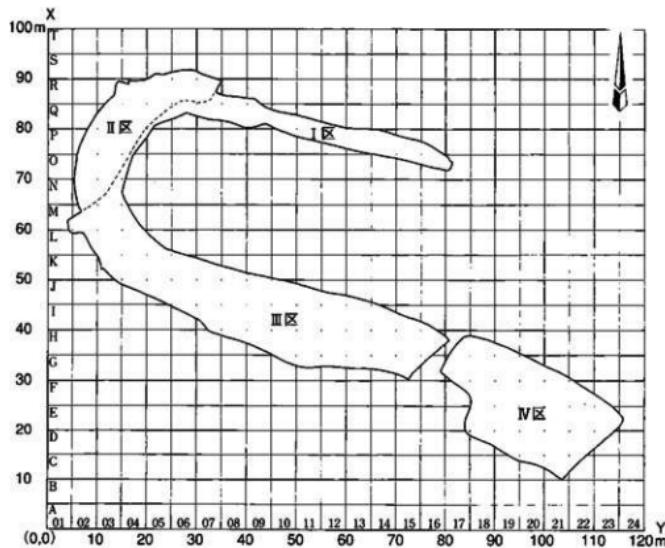
大月市を東西に横断する中央自動車道富士吉田線は、昭和44年（1969年）の全線開通以来、東京と名古屋方面とを結ぶ主要幹線として重要な役割を担ってきた。しかし、山岳地を縫うように造られたこの道路は傾斜が強くカーブの多い構造と、近年の交通量増加に伴って渋滞が頻繁に起こるようになったため、上野原町から大月市内にかけて、こうした構造の改良と4車線から6・7車線への幅員拡幅が計画された。またこれと共に大月市駒岡町強瀬地区では現中央自動車道で分断されている南北地区を結ぶ側道が新たに計画され、日本道路公団によって建設されることになった。そこで本事業の実施に伴い山梨県教育委員会によって予定地内の分布調査が実施された結果、遺物の散布が確認されたため、安楽寺東遺跡と命名され、周知化がはかられた。こうした経緯を受け、工事開始に先立ち山梨県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが、買取済の用地約2,482m²に対して平成10年（1998年）5月25日～8月19日に亘り約3ヶ月間発掘調査を実施したものである。また、この事業全体の対象遺跡としては7遺跡あり平成7年度から発掘調査が開始されたが、このうちの矢坪遺跡・談合坂遺跡・原平遺跡についてはすでに報告書が刊行されている（山梨県教育委員会1998b、山梨県教育委員会1999）。

なお、調査地点の付近には地形面によって異なる時代・性格の遺跡が存在する可能性があり、今後この遺跡の内容がより詳細に判明した時点で遺跡名を地形面や分布範囲に従って細分する必要が生じるかも知れない。

第2節 調査の概要

第1項 調査の方法および遺跡の概要（第1・2図）

調査地は、設計された道路の形状から総延長約200mになり、しかも傾斜地を上って中央自動車道を越境する設計となっていることから、いくつかの地形面にまたがっていた。また排土を場内で処理する必要から



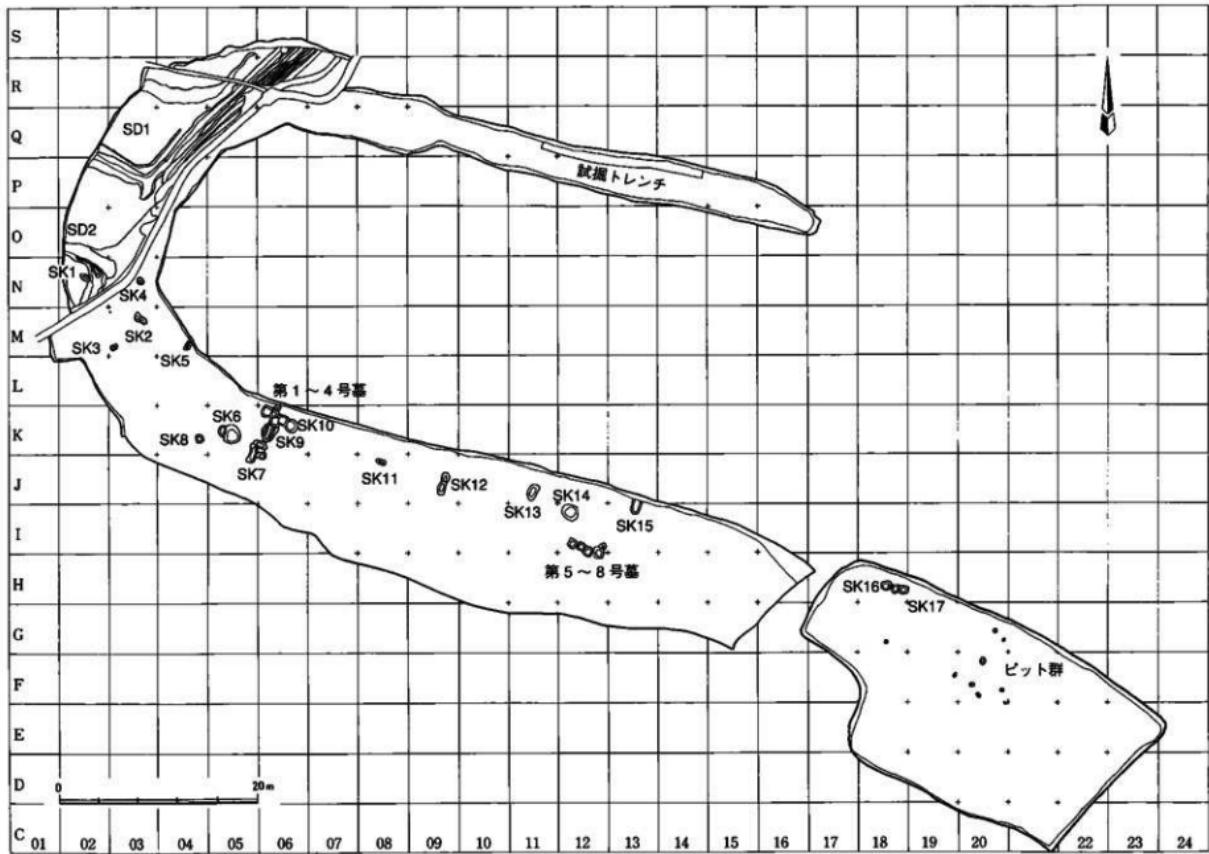
第1図 調査区割り設定図 (1/1,000)

一度にすべての表土を剥ぐことは物理的に不可能であったので、全体を地形面や水路などの人工物からⅠ～Ⅳ区までの4つの区画に分けた。そしてまず最も低いⅣ区から表土剥ぎおよび調査に入り、終わった段階で順次Ⅲ区・Ⅱ区、そしてⅠ区へと調査範囲を移していく。なお、各区の調査面積は、Ⅰ区が183.8m²、Ⅱ区270.4m²、Ⅲ区934.3m²、Ⅳ区534.9m²の合計約1,923.4m²である。

表土剥ぎ着手後、発掘調査を開始するにあたっては、調査地点を把握するためにはまず公共座標に

第2図 安来号実測断面図 (1/500)

- 2 -



基づいた地区設定を行う必要があった。またこれには対象となる調査範囲はもちろん、遺跡の可能性を考えられる範囲全体に対してもできるだけ含める必要があるが、当初の中央自動車道建設時にはこの地域は未調査のまま工事されたことと、今までに試掘調査等を受けていないため遺跡範囲の推定は困難であった。そこで今回の調査範囲全体が納まるようにⅢ区の南西を基点（X=0、Y=0）とし、南北方向をX軸、東西方をY軸とする国土座標系に合わせたメッシュを全体にかけた。さらに調査に際してはX・Y両軸の5mごとの交点に杭を打ち測量用に使用した。この基点の国土座標値は、X=-43000.000、Y=42000.000である（第1図）。なお、調査時には基点から北に向かって5mごとにAから順にアルファベットを振り、基点から東に向かって同じく5mの長さごとに1から順に番号を割り当て、両者を総合して各スクエアの名前とし、遺物を取り上げる際などの補助とした。

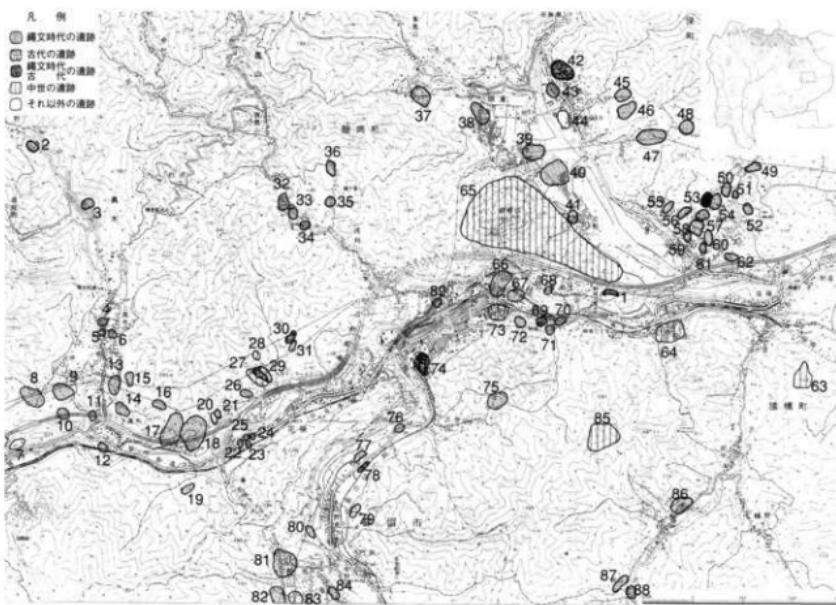
そして表土剥ぎおよび地区設定のできた地区から順次調査に入ったが、全般に緩斜面地であることから耕作土を取るとすぐにローム土となり、その上面で遺構の確認を行った。表土層はⅡ区が最も薄く、Ⅰ区・Ⅲ区西寄りも比較的薄い。これに対しⅢ区西寄りおよびⅣ区では数10cm～1m程度あり割合に厚かった。

確認された遺構には種別に番号を付け、順次移植等による掘り下げ、図・写真による記録作業を行なった。遺構図および遺物分布図は基本的に平板によって記録したが、遺物微細図については簡易やり方測量によつて図化した。また遺物取り上げ作業は手作業で実施した。

なお、最も高く平坦面に近いⅠ区の一部に旧石器時代遺構・遺物の有無を確認するため長さ16mほどのトレンチを設定し、ローム土下まで約50cmほど掘り下げたが何も出土していない。

以上のような経緯を受け道路予定範囲内を発掘調査した結果、後述するように奈良・平安時代の溝2条、近世・近代の墓塚8基、土坑16基などの遺構が確認された（第2図）。

また遺物は量的には少ないものの縄文土器・石器・古墳・奈良・平安時代土器、近世・近代陶磁器類などがあるが、特に墓塚内からは良好な保存状況にある人骨が出土したほか、いくつかからは若干の副葬品も出



第3図 安楽寺東遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

第1表 安楽寺東遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	構成時代	吉備時代以前	番号	遺跡名	構成時代	吉備時代以前
1	安楽寺東	中・後	古墳時代・奈良・平安・奈良・近代	46	三日月	不明	
2	石碑群	中		47	大日山	早・唐・中	
3	大糸田塚	中		48	大日山2	中	
4	大糸田塚	中・後		49	カツマ	早・中	
5	御所	中・後		50	高木本ノ1	中	
6	上白木塚	中・後		51	高木本ノ2	中	
7	川向	後	古跡?	52	高木原	中	
8	沢の原C	中		53	寺尾2	早・中・後・晚	平安
9	御殿跡	中・後		54	西側本ノ1	中	
10	沢の原A	平・後・中・後		55	大坂	新・中	
11	小竹野	中		56	花輪	不明	
12	吉木塚	中		57	今井1	中	
13	中守塚	平・前・中		58	下台	前・中・後	
14	後山熱	中		59	相模山	中	
15	梅久保	中		60	八幡2	中	
16	兵神	中		61	八幡1	中	
17	望牛B	平・前・中・後		62	お令子ヶ谷	早	
18	望牛A	平・前・中・後		63	麻生の城山		中世
19	今ノ田	前・中		64	丹波尼取(藤原氏田)		中世
20	西ノ上C			65	岩出山		中世
21	西ノ上B	前	平安	66	四木本	中	
22	望都4	後		67	晴山	後	
23	望都1	中・後		68	西側	中	平安
24	望都2	後		69	御所	平・前・中・後・晚	奈良・平安・近世
25	望都3	後		70	中組	不明	
26	浅林	前		71	泊本人	不明	
27	花咲跡跡		中後	72	高須山	不明	
28	望都		中後	73	安樂寺敷		中世
29	芝草		平安・中後	74	大月	中・後	奈良・平安・中世
30	赤道1	前	平安	75	地蔵堂	不明	
31	赤道2	前		76	先・宮	前・中・後	
32	岩下	中		77	岡出	前・中・後	
33	船平	中		78	施築	前・中・後	平安
34	浅利人		奈良・平安	79	山營	中	
35	浅利平石1	不明		80	小舟原	中	
36	浅利平石2	不明		81	城内裏		奈良・平安
37	河井	中		82	名跡	前・中	
38	明治村スバ	中		83	芭蕉	前・中	
39	木戸狩	中・後		84	足	中	
40	若狭の台	早・中		85	御植御前山		中世
41	円通寺跡		平安	86	下山武	中	
42	鳥羽小塚	平・前・中・後	平安	87	むらさき	中	
43	冲手	平		88	割り小沢	中	
44	七段山学校校庭			89	天神	後	
45	土屋1	不明					

土している。

以上のように、今回の発掘調査では今までその存在が知られていなかった場所から、いくつかの時代の遺構の存在が明らかとなった。さらにこれらの遺構内容からは調査範囲外にもその一部が統一していることが予測される。

第2項 安楽寺東遺跡の立地と周辺の遺跡（第3図）

安楽寺東遺跡は、大月市賀岡町強瀬に所在する。中山湖に端を発した桂川は、大月市花咲で笛子川を併せ東遷するが、本遺跡はこの合流地点より3kmほど下流、同河川左岸高位段丘面上に立地する。Ⅲ区から桂川の現水面までは、少なくとも2面の段丘面がある。

第3図は安楽寺東遺跡の位置および近隣に分布する遺跡の位置・範囲を、大月市遺跡分布図（大月市教育委員会1995）、都留市史（都留市1986）などから集成し示したものである。なお、奈良・平安時代の遺跡については御所遺跡発掘調査報告書（山梨県教育委員会1998c）において遺跡分布状況を概説しているので参照されたい。本遺跡の近辺では同じ強瀬地区内で平安時代集落である西畠遺跡が調査されている他、西側には円墳で無袖胴張の横穴式石室を有し7世紀後半から8世紀初頭の須恵器が出土した強瀬子の神古墳が存在している（笠原1996：702-703）。

また近世の遺跡は考古学的にはほとんど明らかではない。1814年（文化十一年）松平定能編纂の甲斐国志によると（佐藤1968）、安楽寺東遺跡の立地する強瀬村は戸数79、人口353人（男181・女172）が住む集落で、同集落内の東寄りにある安楽寺は竜水山安楽寺といい浄土真宗西本願寺の寺院で、享保五年（1720年）までは真竜寺と号されていたという。

（小林公治）

第2章 検出された遺構と遺物

発掘調査の結果、II・III区から縄文時代の土器・石器、II区から奈良・平安時代の溝や土器類が、またIII・IV区より近世・近代の墓塚や土坑・ピット群が検出された。そこでこれらについて、各時代ごとに記載して行く。

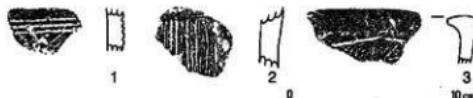
第1節 縄文時代の遺物

今回の調査範囲からは縄文時代の遺構は確認されなかったものの、第1・2号溝を中心とするII区およびIII区の西端区域から数十点程度の縄文土器・石器がやや集中して出土した。これらの遺物が出土した地点は現中央道側から次第に低くなってくる面とそこから一段的に下がっている境部分にあたり、本来上位面にあったものが自然・人為的要因により集積してきたものである可能性がある。とすれば、縄文時代の活動中心は調査範囲外にあたる西北側の上位面にあることが予測されよう。

(1) 土器 (第4図)

出土した縄文土器はすべて小破片で多くは無文のものであり、図示できたのは3点のみである。

第4図1は中期初頭五領ヶ台Ⅱ式と見られる深鉢の破片である。横線沈線で上下を区画し縦・斜位の沈線



第4図 遺構外出土縄文土器

で文様を構成している。N03区出土。2は中期後半曾利Ⅲ式と見られる深鉢の破片である。沈線を縦に多数加え、その上位に横位になんで文様を区画している。L05区出土。3は後期前葉堀之内2式と見られる口縁部の破片である。内側に突出する平口

縁の深鉢と見られ、口縁際の外面に沈線で横位に区画しその内を縄文で埋めている。第6号土坑出土。

(2) 石器 (第5図)

第5図1は比較的夾雜物の多い黒曜石製の搔器である。両側に棒状の剥離を加え三角形状の形態にした後、やや湾曲する末端辺全体に急角度の整った平行剥離を連続して加え、刃部を形成している。重量は21gである。



第5図 遺構外出土縄文石器

る。Ⅲ区出土。2は玄武岩製の磨石類破片である。多孔質で扁平な丸石の両面ほぼ全体がかなり摩滅している。また遺存部分には敲打痕は見られない。現存重量は63gである。第1号溝出土。3・4は打製石斧である。3は粘板岩製で短冊形に近いものである。加工度は全体に低く、刃部はほとんど二次加工無く、片側側縁も原縁面がそのまま残されている。残ったもう片縁も數カ所の剥離が見られるに過ぎない。重量は78gである。第2号溝出土。4も粘板岩製で短冊形のものである。片側端部が若干欠損している。刃部は若干のラフな加工が加えられているに過ぎないが、両側縁辺には裏面から剥離が細かく連続して加えられている。現存重量は223gである。M02区出土。

第2節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構と考えられるものには、Ⅱ区から検出された第1・2号溝がある。また遺物は同区を中心として隣接するⅢ区の西寄りから併せて数十点程度の土師器・須恵器破片が出土している。土器類の内訳は圧倒的に甲斐型壺が多く、他に数点の須恵器壺・甕類胴部破片、古墳時代土師器壺片がある。

第1項 溝

(1) 第1号溝 (第6・7・9図)

遺構 第1号溝は調査範囲全体で最も西寄りにあるⅡ区で薄い耕作土の直下から検出された、幅広で「く」字状に延びる溝である。一段高くなっているⅡ区の平地面全体を囲むように地形面に沿って南北方向におよそ22m直線的に延び、南側ではほぼ直角に折れて西方向に6m以上続いている。ただし、屈曲部分では折れずにさらに南へ延びるような掘り込みも見られ、本来はもう少し平坦面縁辺まで続いていたのかも知れない。

溝は全体に浅くなだらかに掘り込まれている。この溝は全体では2m～3m幅広のものとなっているが、形状およびセクション面の観察から、少なくとも溝a～溝fまでの6本の細い溝が隣接して掘り込まれた結果で、本来はもっと細いものであったことがわかる。土層の切り合い関係から推定される順序は新しいものから古い方に、溝a・b・d・e・fの順で、溝cは溝a・bとの関係は不明であるが溝d・e・fよりも新しい。そしてこうした各溝の関係から、一連の溝はおむね内側から外側に向かって順に掘られていった様子が窺われる。また途中で途切れている溝fや、途中で形跡が追えなくなる溝cのように、すべての溝が必ずしも同様の方向・長さで掘り込まれていたわけではないようである。こうした中で、溝eはもっとも掘り込みのしっかりしているもので時期的にも初期のものであることから、これらの溝の当初の意図や機能を示している可能性がある。またこの溝の東辺では一部で小礫が敷き詰められたようにして検出されている。この他、東寄りの溝の一部では硬化面が確認された。

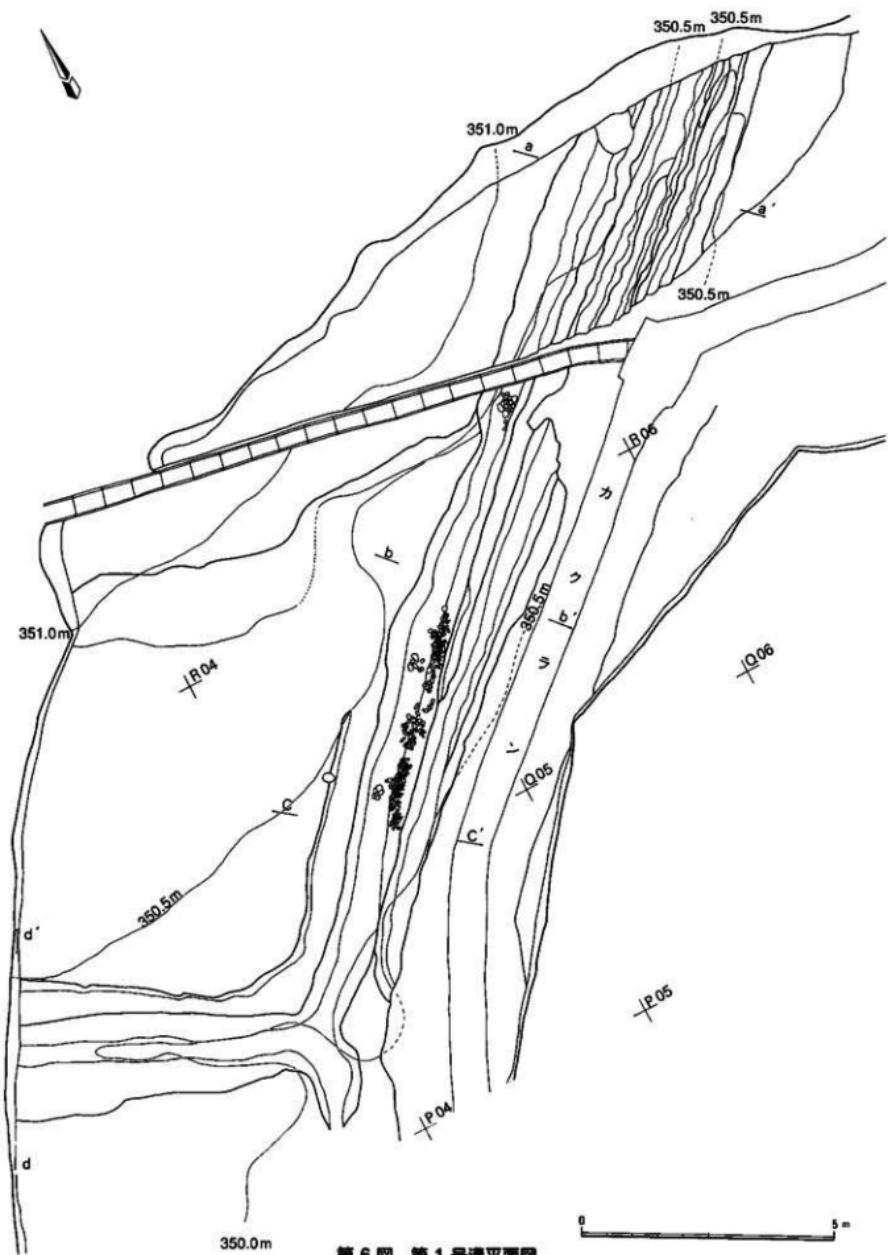
この溝周辺からは調査範囲の中では奈良・平安時代土器がやや集中して出土している。また溝bの最下層からは須恵器片が出土しており、これらの遺物からこの溝は奈良・平安時代に形成されたものだと考えておきたい。

遺物 溝内から出土した遺物の内、図示したのは須恵器破片1点である。第9図1は蓋・甕類の胴部破片と見られ、外面には自然釉がほぼ全面に掛かっており上位から下方へやや釉垂れしている。内面は同心円状の当て具痕が見られる。

(2) 第2号溝 (第8図)

遺構 1号溝の南、Ⅱ区の段丘境に沿うようにして東西方向に掘り込まれているものである。西寄りは調査範囲外に続き、東側は排水溝によって攪乱されているため判然としないが、やや南東に方向を向かながら開口して終わっていくようである。また中途で一部島状に掘り残している。内部には砂礫ではなく褐色土が堆積しており、水が流れていた形跡は窺われない。こうした状況からこの溝の機能としては段丘面と密接な関係を持ち、それを段切りするような性格のものであった可能性が考えられる。

開口部寄りの溝内部およびその周囲からは比較的多くの遺物が出土している。これらには縄文土器・石器、奈良・平安時代土器、近世以降の陶磁器類などがあるが、縄文時代遺物が上位面からの落ち込みによる可能性が高いこと、また上述のようにこの溝はⅡ区段丘面を意識して掘り込まれたと見られ、上位面には第1号溝があることから、根柢は弱いもののこの溝もこの時代の所産であると考えておきたい。



第6図 第1号溝平面図

第2項 遺構外出土遺物（第9図）

古墳・奈良・平安時代の遺構外から出土したこの時代の遺物のうち実測を行ったのは土器部2点と須恵器1点の3点である。2は古墳時代の壺と見られ口縁部が短く大きく外反する。復元口径9.8cm、全体に焼成は大変良く堅致で橙褐色である。表採。3は甲斐型壺の底部である。復元底径3cmで、外面底部際は斜位のケズリ、内面には暗文が見られる。底面は回転糸切り離しの後、周辺の一部を削っている。9世紀代のものと見られる。4は須恵器壺・甕類の胸部破片と見られる。外面には若干の降灰が見られ、内面は同心円状の當て具痕が残っている。表採。

第3節 近世・近代の遺構と遺物

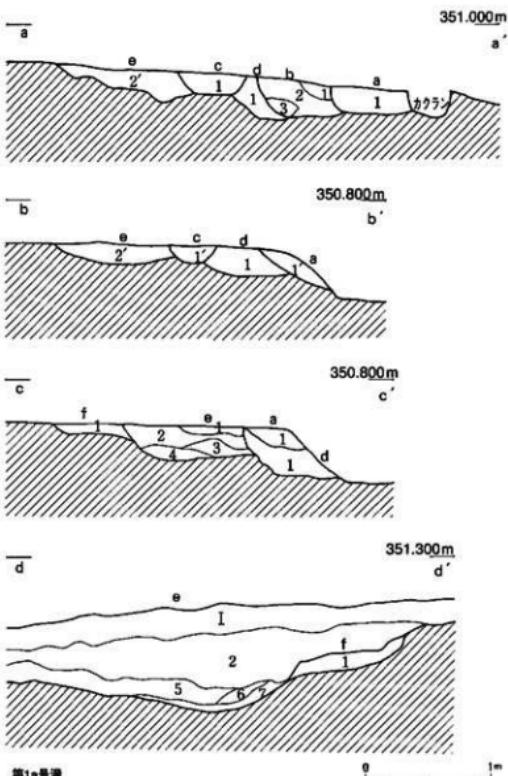
近世・近代の遺構と見られるものは、8基の墓、16基の土坑、9ヶ所のピットがあり、これらはⅢ区からⅣ区にかけての低い面からやや散発的に検出されている。遺物もこれらの遺構に伴って出土したものが主体であるが、陶器類などは同区の遺構外からも出土している。

第1項 墓

(1) 第1～4号墓（第10・11図）

遺構 Ⅲ区西寄り、K06区から検出された。4基が若干の切り合いを持ちながら東西にほぼ一直線に並んで作られている。

切り合い関係および出土遺物から予測される構築順序は、新しいものから古いものの順に第4号、第1号・第3号、第2号となると見られる。第4号墓からは大正8年の一銭銅貨および大正5年開業の大月市小俣医院（現小俣クリニック）の薬瓶などが出土しており、それ以後おそらく大正末年頃までの間に埋葬されたものと推測される。また第1号墓からは頭の丸い洋釘が出土しており、明治期以降のものと見られる。そして最も古いと考えられる第2号墓からは摩滅のため銭文全体の判読は不能であるが、方孔の銅錢が2枚出土している。そしてこのうちの1枚ではかろうじて「寶」の文字が読みとることができ、寛永通寶と考えられることから、江戸期の埋葬と推測される。とすれば、両者の中間時期になる第3号墓はおそらく江戸から明治期の間に埋葬



第1号溝

1. 棕褐色土 7.5YR4/4 ややボソボソの土。

1'. 暗褐褐色土 7.5YR2/3 ボソボソで混ざりの少ない土。

第1号溝

1. 暗褐褐色土 7.5YR2/3 混ざり少なくやや暗い。

2. 暗褐褐色土 7.5YR2/3 白色粒子を多く含むしました上。

3. 棕褐色土 7.5YR4/4 固くしました砂質土。須恵器出土。

第1号溝

1. 晴褐色土 7.5YR3/4 白色粒子を多く含むしました土。

1', 暗褐褐色土 7.5YR3/3 白色粒子を若干含む。

第1号溝

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 第1c号溝1層よりも暗くしまっている。

第1号溝

1. 純土。

1. 暗褐褐色土 7.5YR3/4 砂を少し含むボソボソの土。

2. 棕褐色土 7.5YR3/3 2層にやや白色粒子を多く含む。

2'. 棕褐色土 7.5YR4/3 混ざりの少ない土。

3. 暗褐褐色土 7.5YR4/3 2層に似るがオレンジ粒子を少し含む。

4. 黑褐色土 7.5YR3/2 混ざりの少ない粘質土。

5. 黑褐色土 7.5YR4/2 岩片・砂ちらなり、若干ラミナ状。固くしまっている。

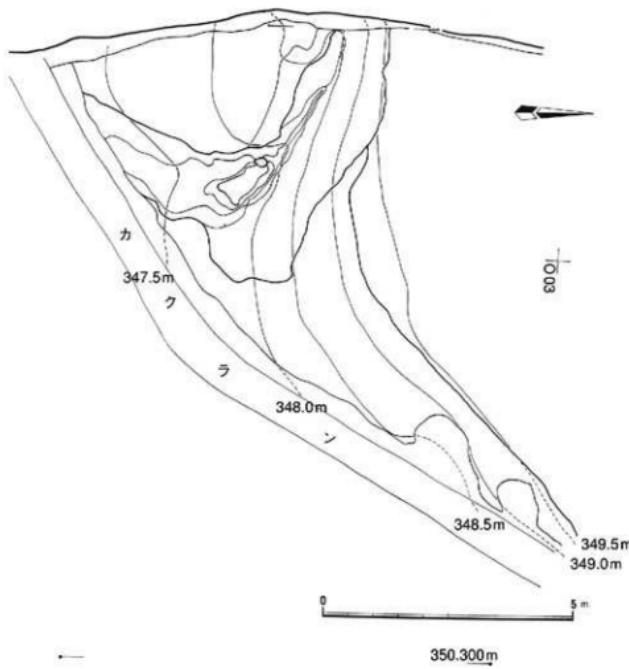
6. 黑褐色土 7.5YR3/2 第1f号溝1層に似るが、ややしまり弱い。

7. 棕褐色土 7.5YR4/4 砂を含み粘質で混ざりの少ない土。

第1号溝

1. 暗褐褐色土 7.5YR3/4 第1e号溝2層よりも明るい。

第7図 第1号溝断面図



第2号溝

1. 精作土。
2. 暗褐色土。7.5YR3/4 ローム粉・大粒砂を含み、しまった土。

第8図 第2号溝平・断面図

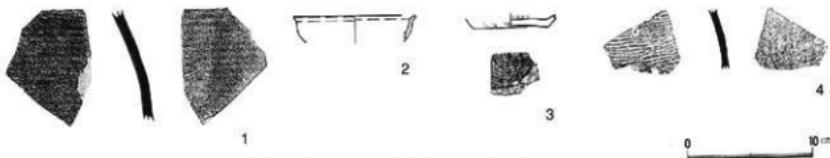
されたものと考えられるであろう。ただしこれらの墓が完全には重ならず向きを揃えて配置されていることは、新たな墓壙を掘削する際に前に作られた墓壙の位置が墓標等によっておおよそ承知されていたこと、そして被葬者が相互に何らかの血縁関係を持っている人物を埋葬したことを意味していると思われる。

第1号墓

遺構 第4号墓壙に切られ、第2号墓壙よりも新しいものである。一辺約75cmほどの略方形で確認面からの深さは約80cmである。第4号墓壙の人骨や副葬品などが本墓壙の範囲内からも出土しているが、この他に一体分の人骨が出土した。人骨以外には釘が数点出土しているが、これらには洋釘の他、和釘も含まれているようである。なお釘は錆化が激しく、図示可能な遺物はない。

第2号墓

遺構 この4基の墓壙の中では一番最初に作られたと見られるものである。一辺約1mほどの略方形で、確認面から深さ90cmほど掘り込まれているものである。また降雨により雨水が流れ込み頭蓋骨など一部遺物の位置が大きく移動したため図化できなかった。しかしながら頭蓋骨は脚など



第9図 古墳・奈良・平安時代土器・陶器

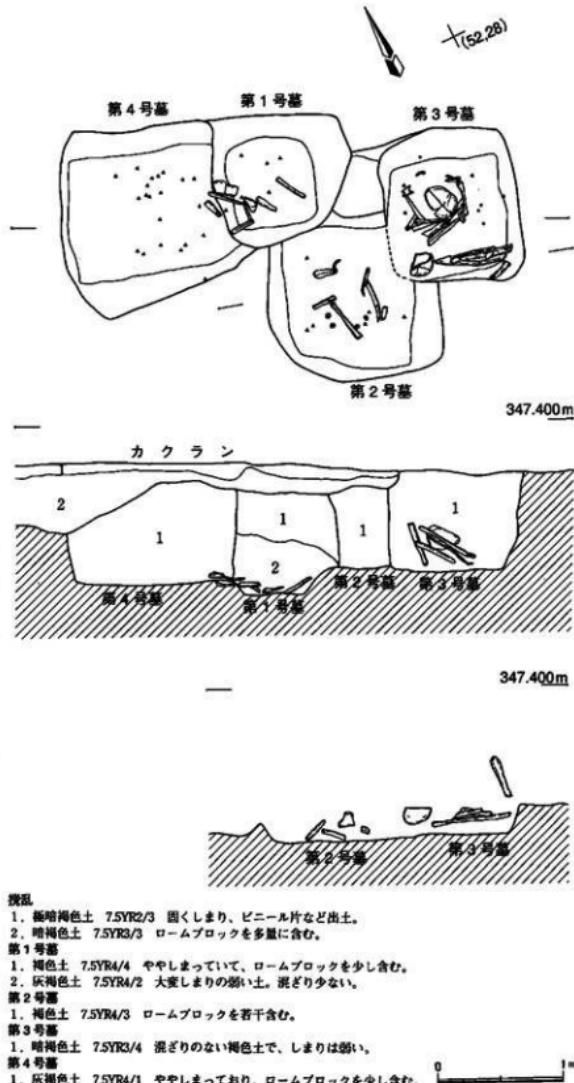
の骨に囲まれるようにして中央から出土したのは他の墓と同様であった。人骨以外には銅錢 2 枚、鉄錢 2 枚、和釘数点が出土している。

遺物 出土遺物の内、銅錢、鉄錢を 4 枚を図示した。1・2 は銅錢である。1 は直径 2.35cm、厚さ 1 mm ほどで、中央に一辺 8 mm の方孔が見られる。木質の付着や銹化で状態は悪くまた摩滅しているため錢文全体は判読できないが、上述のようにかろうじて「寶」の字だけは読みとることができる。2 は直径 2.25cm、厚さ 1 mm ほどで、中央に一辺 7 mm の方孔が見られる。もともと非常に状態の悪い錢であったためか錢文は全く判読できないどころか表裏の区別も困難である。3・4 は鉄錢である。2 枚が貼り付いて出土した。いずれも方孔を持ち、外周縁や孔の周縁は表裏面共にわずかであるが一段高くなっている。3 は直径 2.6cm、孔径 6.5mm、4 は直径 2.5cm、孔径 6.5mm である。なお、長佐古真也氏は多摩ニュータウン No.335 遺跡での分析において新寛永鉄錢までを含む副葬錢組み合わせに 19 世紀中から後半頃までの年代を与えており（長佐古 1997）、本墓墳出土錢が新寛永であるとすれば、同じ頃の年代が与えられるであろう。

第 3 号墓

遺構 4 基の中で最も東側にあり、一辺約 90cm、確認面からの深さ約 60cm のほぼ正方形のものである。墓墳中央部で、東西に離れて両下肢骨が立ち、その北側から頭蓋骨が出土している。この遺体とは別にさらにその南壁際からもう一体の遺体が骨の向きを描えたように出土した。このことから当初納められてあった遺体を片付けて後から別の遺体を入れたものと考えられる。こうした出土状況からすれば、この両者は親子や兄弟のように特に密接な関係を持つ人物であると推測される。また人骨の出土位置から、中央人物は南側を向いて座らされていたようである。

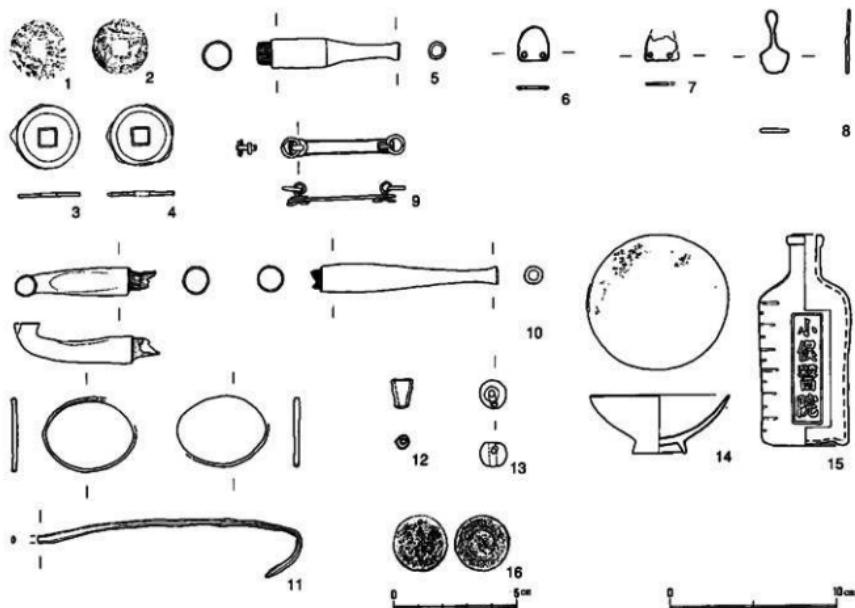
人骨以外には後から埋葬された中央人物の副葬品と見られる足袋のコハゼ 2 点、金具 2 点、鉄釘数点が出



第 10 図 第 1 ~ 4 号墓平・断面図

た。このことから当初納められてあった遺体を片付けて後から別の遺体を入れたものと考えられる。こうした出土状況からすれば、この両者は親子や兄弟のように特に密接な関係を持つ人物であると推測される。また人骨の出土位置から、中央人物は南側を向いて座らされていたようである。

人骨以外には後から埋葬された中央人物の副葬品と見られる足袋のコハゼ 2 点、金具 2 点、鉄釘数点が出



第11図 第1～4号墓出土遺物

土しているが、銹化のため和洋釘の区別は困難である。コハゼの存在から追葬者は足袋を履かされていたことがわかる。また先に埋葬された南側人物のものと見られるキセルが出土している。

遺物 出土遺物の内、キセル、銅錢、足袋のコハゼおよび棺の飾金具を図示した。5はキセル吸口である。木質のラウが一部遺存している。肩部は弱い段を持って太くなり、ほぼ同じ太さで移行している。口付け部はやや肥厚する。長さ5.2cm、肩部長2.2cm、ラウ接合部径1.2cm、吸い口部径0.7cmである。6・7は足袋のコハゼと見られる金具である。頂部の丸い三角形様で銅製と見られる厚さ1mmほどの薄い板を用いており、底辺には両端に糸かがり用の小孔が穿たれている。8は用途不明の銅製金具である。ヘラ状の形態で厚さ1mmほどの薄い板で造られている。長さ2.6cm。9は棺の飾り金具と見られるものである。長さ4.2cmの細長い長方形板の両端に長方形の小孔を穿ち、そこに銅線を折り曲げて接合用の環状金具を入れ込み、その中に直径8mmほどの環を通して。また片側には基板の穴隠しの丸い金具が残っており、本来は両側に附属していたと見られる。

第4号墓

遺構 4基の中で最も西に位置し最も新しく作られたものである。下場で南北約1m弱、東西は推定で約1.3mほどと見られ、確認面からの深さおよそ70cmを測るが、他の墓壙とは異なり規模がやや大きく、東西に若干長い長方形墓壙のようである。このことが死者の姿勢など埋葬方法の違いを意味するのかどうかは興味深いところであるが、改葬等による掘り出しのためか人骨は若干の骨片以外にはほとんど見つかなかつたために具体的な検討は難しい。ただし鉄釘はかなり多数出土しており、木製の棺が使われていたことは間違いないであろう。ただ第1号墓を切って作られているため一部その遺物が混ざっている可能性がある。また掘り返しが改葬のためだとすれば、それがこの墓だけに限定されているのは、改葬の時点では第1～3号墓の存在はすでに忘れていたことを示すかも知れない。

鉄釘以外の遺物としては、一銭銅貨1枚、キセル、盃、眼鏡、薬瓶など故人のものと見られる副葬品が比

較的豊富に出土している。

遺物 出土遺物の内、銅錢、盃、眼鏡、薬瓶、キセル、玉類を図示した。10はキセルである。雁首部と吸口とが別々に出土したもの本来は同一のものであったと見られる。それぞれラウの木質が若干残っている。雁首部はかなり小形の火皿を持ち、首部から段差無く一体的に立ち上がっている。また油返り部はさほど湾曲せずに折れ、若干肥厚しながら肩部へ移行している。長さ4.8cm、火皿径0.9cm、ラウ接合部径1.2cmである。吸口は、やや肥厚している口付け部から一旦やや細くなり、肩部へ向かって段差無く徐々に太くなり、その後はほぼ同じ太さで移行している。長さ7.2cm、ラウ接合部径1cm、吸い口部径0.7cmである。なお表面の腐食程度が他のキセルと比較して弱い。11は眼鏡である。遺存状態があまりよくななく両眼部および片側の弦部のみが図示できた。金属部分は銅製でレンズを銅製の縁でくるんで巻いている。また弦は断面楕円形の銅線を折り曲げて整形している。12は用途不明の玉製品である。筒状で段を持ち白色のガラス製と見られるが、用途ははっきりしない。長さ1.2cm、上端径0.9cm、下端径0.6mmである。13は円玉である。直径1.1cmの玉に3mmほどの孔が穿たれているが、そこに向かって横からも小孔があけられている。数珠などの一部の可能性があるうか。14は盃である。花枝らしき文様が上絵付けされており、また「腰が張らずに立ち上がり、器高が低く、大きく口縁が広がる形態」の「大平形」(厚木市教育委員会1995:100)のものであることから、20世紀前半の年代が与えられると思われる。15は薬瓶である。200ml入りの透明のもので縦半分に成型され接合されている。また胴部には大正5年に開院した小保医院の銘が入っている。16は銅錢である。一錢銅貨で大正8年に製造されたものである。直径2.2cm。

(2) 第5～8号墓 (第12・13図)

III区の東寄り、H～I 12区から検出された。第1～4号墓と同じく、東西にほぼ一直線に向きを揃えて作られており、やはり新たな墓壙を掘削する際に、前に作られた墓壙の位置が承知されていたのであろう。このことから同様に被葬者が相互に何らかの血縁関係を持っていたことが推測される。墓壙間にはほとんど切り合い関係が無いため時間的な前後関係は不明であるが、第6号墓壙は第7号墓壙よりも後に作られている。また出土遺物に銭貨といった遺構の所属時期をほぼ確実に特定できるものがないため構築時期等の限定は困難であるが、墓壙の配置や構造、そして青銅製キセルの形態やいずれも和釘が出土していることなどから、第1～4号墓壙よりも総じて古く、おそらく江戸時代後半(19世紀頃)から明治時代初頭くらいにかけてのものと見られる。また釘がすべての墓壙から出土し、特に第8号墓では多数出土していることからやはり桶ではなく棺に埋葬されていたと見ることができる。全体に副葬品はごく少なく、銭はまったく出土していない。

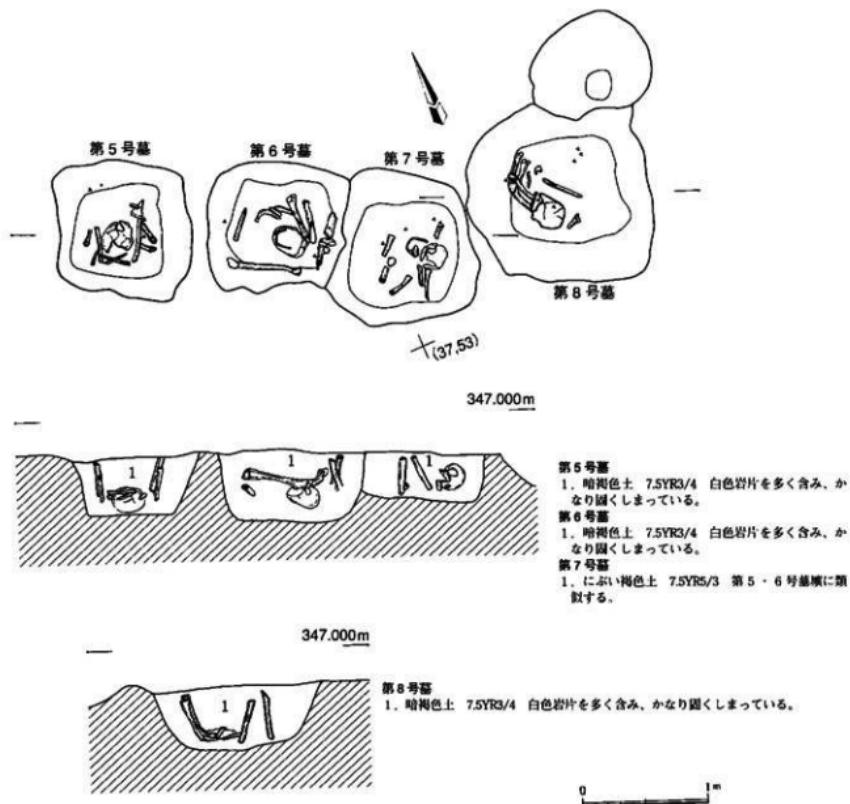
第5号墓

遺構 最も西側に位置するもので、一辺約80cmの略方形、確認面からの深さは35cmほどのものである。内部からは良好な遺存状態で人骨が出土したほか、棺に使用された釘などが出土した。人骨は東西両側寄りに下肢骨が直立して検出され、その間から頭蓋骨が出土した。また前腕骨が頭蓋骨の南側より東西方向を長軸として出土している。こうした人骨の出土位置から、中央人物は南側を向いて座らされていたようである。また人骨以外には、棺に使われた和釘が數点出土しているが銹化が激しく、図示可能な遺物はない。

第6号墓

遺構 この一群で西から二番目に位置するもので、一辺約80cm弱の略方形、確認面からの深さ約45cmである。東の第7号墓壙を若干切って作っている。やはりかなり人骨の遺存状況はよく、両足が東西に分かれて一部が直立する下肢骨の間に頭蓋骨が落ち込んでいた。また南壁際では下肢骨が東西に壁に沿って置かれており、追葬時に前の被葬者の骨を片づけたものと見られる。人骨以外の出土遺物は少なく、和釘と棺の飾金具、銅製キセルの雁首と吸口がセットで出土している。

遺物 出土遺物の内図示したのは、銅製キセルおよび棺の飾金具である。1はキセルである。よく似た特徴を持つ雁首部と吸口が出土しており本来は同じ個体であったと見ることができよう。それぞれラウの木質が若干残っている。雁首部は全体に短い。比較的大形で碗形の火皿を持ち、首部との接合部は斜めである。また脂返り部はほとんどなく段差を持って六角形の肩部へと続いている。長さ3.9cm、火皿径1.7cmほど、ラ



第12図 第5～8号墓平・断面図

ウ接合部径1.2cmである。吸口は、雁首と同様に肩部は六角形で短く続き、段を持った後徐々に細くなりながら移行している。口付け部は欠損しているが特に肥厚することもなく終わると推測される。長さ6.8cm以上、ラウ接合部径1.1cm、肩部長2.2cm、吸口部付近径0.5cmである。なおこのキセルと類似した六角形肩部を持つ雁首が山梨県北巨摩郡須玉町塩川遺跡10号墓壙から出土しており、18世紀末から19世紀代に位置づけられている（山梨県教育委員会1992：168）。この年代を参考にすれば、第5号墓も19世紀代の年代が与えられるのかも知れない。2・3は棺の飾金具と見られるものである。2は長方形のもので薄い銅板を用いているが、片端が若干欠損している。中央には植物のような文様が打ち出されている。3は梢円形のものでやはり薄い銅板製であるが、文様ではなく中央に直径3.5mmの円孔があけられている。また片側隅にも直径1mmの小孔があるが、これが当初からのものか腐食等によるものかは不明である。

第7号墓

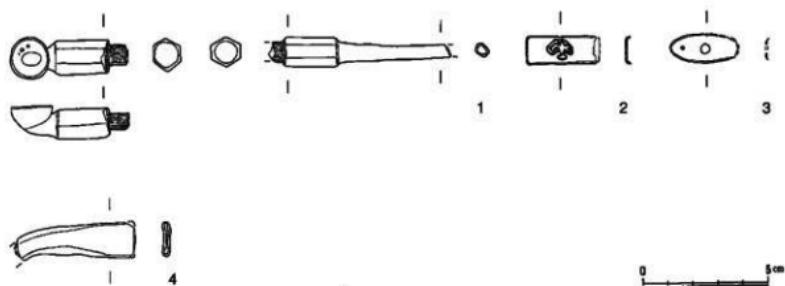
造構 東から二番目に位置するもので、平面形はやや不整な方形で一辺約90cm、確認面からの深さは30cm弱である。西の第6号墓壙によって一部が切られている。やはり人骨の遺存状況はかなりよいが、下肢骨は東西寄りではなく、やや南寄りにさほど間隔を空けずに両足分が立っていた。また頭蓋骨は足のやや北側から出土している。人骨以外の遺物はごく少なく、棺に使われた和釘が数本出土した他、不明銅製品が1点出

土したに過ぎない。

遺物 出土遺物の内図示したのは、銅製品 1 点のみである。4 は一端が欠損している管状の製品である。本来は中空であったと思われるがつぶれている。径は徐々に細くなっているようである。キセルの吸口かとも思われるがはっきりしない。

第 8 号墓

遺構 この一群で最も東寄りにあるもので、隣接する 3 基よりもやや大きく一辺約 1 m の略方形、確認面からの深さ 40cm 弱である。人骨の遺存状況はやはり大変よく、第 7 号墓域以外の 3 基の墓と同様に東西に両下肢骨が分かれて直立し、その間から頭蓋骨が出土している。人骨の出土位置から、中央人物は南側を向いて座らされていたようである。人骨以外の遺物は少ないが、鉄釘が 20 点ほど出土しており和釘であると見られる。しかし銹化が激しく図示可能な遺物はない。



第 13 図 第 5 ~ 8 号墓出土遺物

第 2 項 土坑 (第 14 ~ 16 図)

III 区を中心に散発的に土坑が検出された。これらの形状や規模は様々で出土遺物もほとんどなく厳密な時期の特定は困難であるが、覆土からおおむね墓域と同じ時期のものと考えることができる。

第 1 号土坑 II 区南寄り、X=65、Y=8 ポイント付近にある。東西方向に長軸を持つ長円形のものであり、規模は長軸長約 1.1m、短軸幅約 60cm、深さ約 20cm ほど、縁辺からほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ水平となっている。第 2 号溝との切り合い関係は不明であるが、おそらくこれを切っていると見られる。

第 2 号土坑 III 区西端近く、X=64、Y=13 ポイント付近にある。やや不整な長方形状の形態でちょうど真ん中付近で底面には段を持つ。長軸長約 1.5m、短軸幅約 60cm、深さは西寄りで 35cm ほどである。

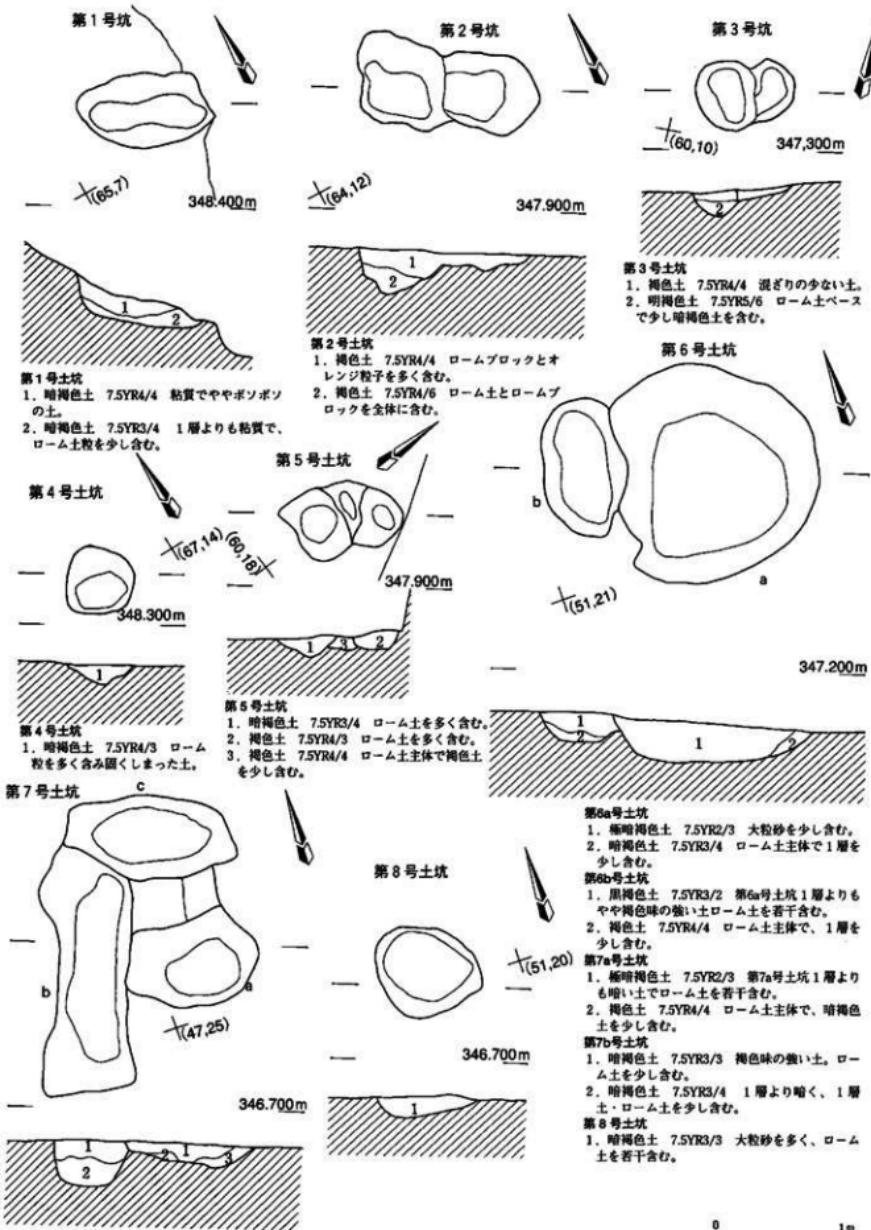
第 3 号土坑 同じく III 区西端近く、X=60、Y=11 ポイント付近にある。椭円形の土坑を二つ合わせたような形態であるが、同一の覆土が上位に堆積している。長軸長約 80cm、短軸長約 55cm ほどで、深さは約 20cm と浅い。

第 4 号土坑 III 区西端近くで第 2 号土坑北、X=67、Y=13 ポイント付近にある。略円形の小形の土坑で直径約 55cm、深さ 15cm ほど、緩やかに掘り込まれている。

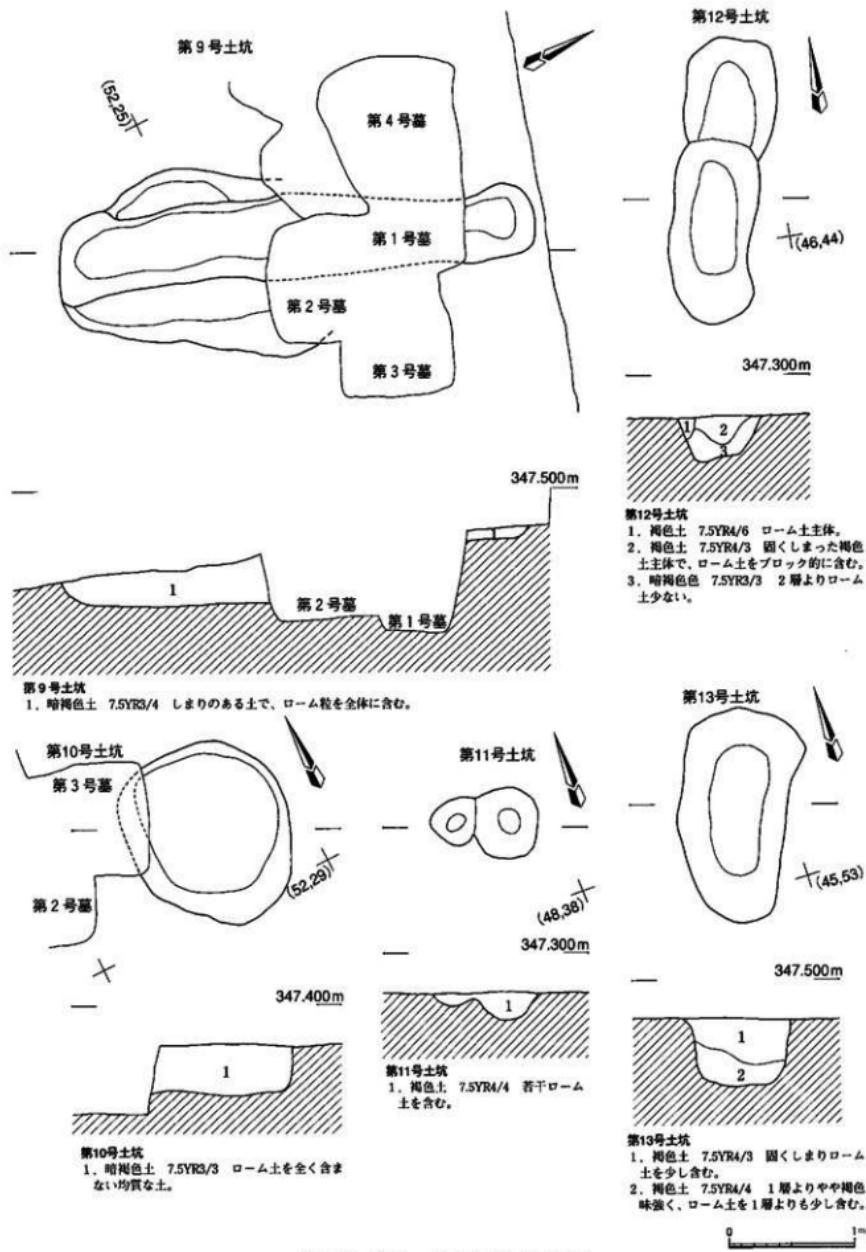
第 5 号土坑 III 区西寄りの調査範囲際、X=61、Y=18 ポイント付近にある。不整な長円形の形態を持つが、セクション面の観察から 3 基の小土坑の切り合いであると見られる。全体では長軸長約 1m、短軸幅約 50cm、深さは 15cm ほどと深い。

第 6 号土坑 III 区西寄り、X=51、Y=22 ポイント付近にあり、西 2m に第 8 号土坑、東 2.5m の位置に第 7 号土坑がある。a・b 二つの土坑の切り合いで、前者は直径約 1.8m、深さ約 35cm の大形円形で緩やかに掘り込まれている。後者は長軸長約 1.1m、短軸長約 60cm、深さ約 25cm の長円形のものである。

第 7 号土坑 III 区西寄り、X=48、Y=25 ポイント付近にあり、西 2.5m に第 6 号土坑がある。a～c の不整長円形の 3 基の土坑が切り合っていると見られる。a 土坑は b 土坑を切っており、長軸長 1.1m、短軸長



第14図 第1～8号土坑平・断面図



第15図 第9～13号土坑平・断面図

約65cm、深さ15cmほどと緩やかに掘り込まれている。b 土坑は南北方向に長く長軸長1.95m、短軸幅約60cm、深さ40cm弱であり、縁辺からしっかりと掘り込まれている。c 土坑は他との切り合い関係は不明であり、長軸長1.3m、短軸長約65cm、深さ約40cmほどとやはりしっかりと掘り込まれている。

第8号土坑 Ⅲ区西寄り、X=51、Y=19ポイント付近にあり、東2mに第7号土坑がある。直径90cmほどの略円形のもので深さは約15cmと浅く緩やかに掘り込まれている。

第9号土坑 Ⅲ区西寄り、第7号土坑のすぐ北、X=52、Y=26ポイント付近にある。形状から溝様の細長い形態を持つと推測される。北寄りを第1~4号墓壙によって切られてしまい、近世以前のものと判断できる。推定復元で長軸長約3.8m、短軸幅約1.4m、深さ30cmほどを測る。

第10号土坑 Ⅲ区西寄り、X=52、Y=28ポイント付近にある。直径1.4m前後の略円形で深さは50cmほどほぼ垂直に掘り下げられている。西側の一部を第3号墓壙に切られていることから、明治期以前のものと推測される。

第11号土坑 Ⅲ区ほぼ中央部、X=49、Y=37ポイント付近にある。緩やかに掘り込まれた二つの円形小土坑が切り合ったような形態であるが覆土は同一である。長軸長約85cm、短軸長約55cmを測る。

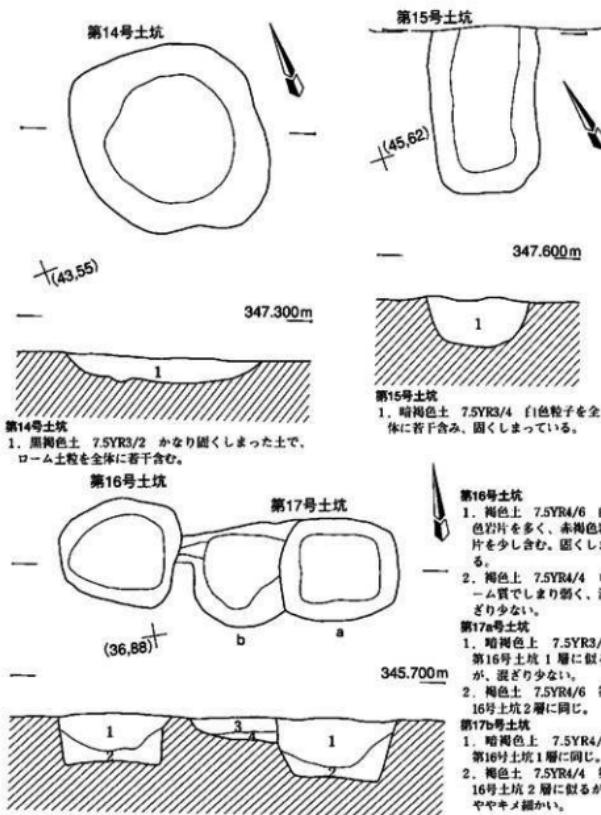
第12号土坑 Ⅲ区中央部やや東寄り、X=47、Y=43ポイント付近にある。南北に長軸を持つ略長円形の形態を持つ。長軸長約2.3m、短軸幅約70cmほどで、底面は北寄りで若干の段を持つ。

第13号土坑 Ⅲ区東寄り、X=46、Y=53ポイント付近にある。長軸長約1.7m、短軸幅約90cmほどの略長方形のもので、縁辺からほぼ垂直に掘り込まれている。

第14号土坑 Ⅲ区東寄り、第13号土坑の南東6m、第5号墓壙の北3.5mに位置し、X=44、Y=56ポイント付近にある。直径約1.5mほど、深さ20cmほどで浅く緩やかに掘り込まれている。

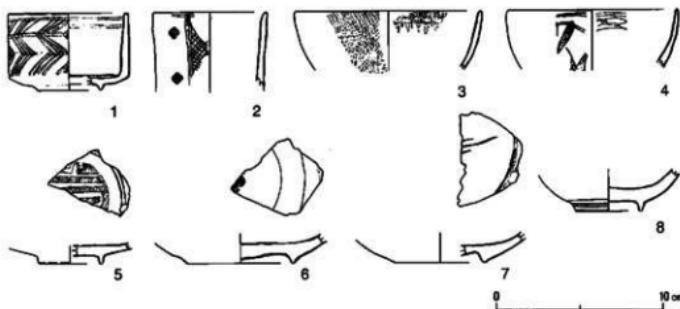
第15号土坑 Ⅲ区東寄り、X=45、Y=63ポイント付近にある。やや緩やかに掘り込まれた略長方形の土坑と思われるが、北側は調査範囲外に伸びている。

第16・17号土坑 Ⅳ区西寄り、X=36、Y=89ポイント付近にある。第16・17号土坑共に一辺約90cm、



第16図 第14~17号土坑平・断面図

深さ約40~50cmほどの方形に近いもので、縁辺からほぼ垂直に掘り下げられ水平な底面となっている。内部からは遺物は全く出土せず断定はできないが、こうした形状からこれらも墓壙であった可能性が考えられる。



第17図 遺構外出土近世・近代陶磁器

第3項 遺構外出土遺物（第17図）

第17図は遺構外から出土した遺物の内、比較的遺存度の高い陶磁器類を図示した。1~4・8は碗である。1・2は筒型のものである。1は口径7.2cm、底径3.9cm、高さ4.7cm。2は口径6.8cm、器高4.8cm以上である。3・4は丸形のものであるが、3は型絵模様で、口径11.4cm、器高3.5cm以上、4は口径10.1cm、器高3.5cm以上。8は底部である。底径4.0cm、器高2.4cm以上。5~7は皿である。いずれも高台盤付けは無類。5は見込み中央に文字をデフォルメしたと見られる文様が描かれている。底径3.8cm。6は見込み中央にコンニャク判による五弁花がある蛇の目釉剥ぎのもので、底径6.3cm。7は底径5.6cmである。

(小林)

第3章 分析

第1節 出土人骨の形質人類学的分析

第1項 緒言

安楽寺東遺跡は、大月市賀岡町強瀬889-1外に所在し、平成10年5月から8月まで山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。発掘された遺構や遺物は、縄文時代、古墳時代から平安時代と江戸時代ー近代のものを含むが、人骨はすべて江戸時代から大正時代の8基の墓壙から出土した。墓壙は、一辺が1m弱の方形で、当時は木棺に座位姿勢で埋葬されていたと思われる。なお、本文中の数字の単位はミリメートル、示数はパーセントである。

第2項 所見

第1号墓

保存部位は、頭蓋片、四肢骨片が断片的に残っている程度である。

頭蓋は、頭頂骨、左右側頭骨錐体、後頭骨が残っている。左右側頭骨錐体の大きさは大きく頑丈で、外耳孔は大きい橢円形である。後頭骨では、ラムダ縫合付近が残っている。縫合は内板では閉じ、外板では癒合消失が始まっている。外後頭隆起はないが、上項線が明瞭に隆起し、後頭骨に付着する筋肉が発達していたと思われる。

歯は、下顎左第1小白歯が保存されている。咬耗は、象牙質が露出し、プロカのⅡに相当する。

四肢骨は、左上腕骨、左右不明の尺骨、左右大腿骨、左右脛骨それぞれの骨体が保存されている。左上腕骨は遠位半が残っていて、骨体は細い。尺骨は骨体片がわずかに残っている。骨表面の風化により、骨体骨間縁の発達は不明である。左右の大腿骨は、骨体中央部が10cm程度保存されている。左大腿骨骨体は、前後につぶれた状態で（体中央矢状径20/体中央横径29）、後面粗線の突出はない。右大腿骨は骨表面の風化が強い。左右の脛骨は骨体の中央部が残っている。風化により骨表面が剥離しているため計測できないが、骨体は扁平な印象である。

この人骨は、縫合の癒合状態や歯の咬耗程度から壮年半ばと推測され、性別は頭蓋骨の特徴から男性と思われる。

第2号墓

保存状態は不良であり、部位が同定できるのは左右不明の上腕骨片、左右大腿骨、左脛骨、右腓骨である。その他の部位では、下顎右第2切歯と右側頭骨錐体、左右不明の寛骨片、胸椎3点が残っている。切歯の咬耗程度は、象牙質が大きく露出し、プロカのⅢに相当する。胸椎の椎体は頑丈で、加齢による変形はない。

大腿骨は、左右とも両端が失われ、骨体中央部が残っている。骨体は太く（左右：体中央矢状径30/体中央横径30）、頑丈である。骨体後面の粗線の隆起は顕著で、いわゆる「付柱」を形成している。左脛骨は骨表面の、風化と破損が激しいにもかかわらず、骨体は太い（中央最小径22/中央最大径30）。大腿骨および脛骨とも、太さは江戸時代男性平均値を上回る。一方、右腓骨は、骨表面の風化による傷みは少ないが、骨体は細く（体中央最小径8/体中央最大径10）男性平均値を下回る。しかし、骨間縁の発達は良好で筋肉の発達がうかがえる。

この人骨は、四肢骨の特徴から男性とおもわれ、年齢は歯の咬耗状態や胸椎の形状から壮年半ばと推測できる。

第3号墓

南側人骨では、頭蓋片、四肢骨骨体、左寛骨が残っている。

頭蓋は、頭頂骨の一部と後頭骨が断片的に保存されている。後頭骨は、外後頭隆起が良好に突出している。ラムダ縫合は開離している。下顎骨は、体高が高く頑丈である。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

8 // / / / 00 | 0000000 // /

／は、齒槽が破損

○は、死後脱落、齒槽開放

下顎右第3大臼歯は萌出したばかりで、エナメル質の咬耗がわずかである。

四肢骨は、左右上腕骨、左尺骨、左桡骨、左右大腿骨、左右脛骨が保存されている。左右の上腕骨は骨体中央部が10cm～20cm程度残っている。骨体は骨表面が風化していて、計測は不可能である。左尺骨は骨体の近位半が残っている。骨頭の一部が破損している。骨表面の風化はない。骨体は頑丈で（矢状径11.5／横径16）、骨間縁が良好に発達している。左桡骨の太さは尺骨に準ずる。左右大腿骨は、両端が破損し、骨体の中央部が良好に残っている。左右とも太く（右：体中央矢状径28／体中央横径26.5、左：体中央矢状径29／体中央横径26.5）頑丈である。骨体後面粗線は摘んだように「付柱」を形成している。左右脛骨の骨体は骨間縁が良好に発達し、太く頑丈である。

南側人骨の年齢は、第3大臼歯の萌出／咬耗状態から壮年初期と推測される。性別は、頭蓋や下肢骨が強壮であることから男性と思われる。

北側人骨では、頭蓋が残っている。脳頭蓋では頭頂骨が破損している。頭蓋形は長頭に属する（示数77.7；最大幅140／最大長180）。前頭骨では、眉間や眉弓の隆起が明瞭である。頭蓋底の大後頭孔の大きさは大きい。右顔面の大部分は破損している。左眼窩は高く、眼窓形は隅丸方形である。眼窓上壁には、貧血に関係のあるといわれるクリップラ・オルビタリアが認められる。梨状口の形状は破損しているため観察できない。鼻根部は平坦で幅が広い。下顎骨は、骨体が高く、頑丈である。オトガイ隆起やオトガイ結節が発達し、明瞭なオトガイ三角を形成している。齒の保存状態は次の鑑式の通りである。

○	7	6	0	0	／	／	／	0	0	6	7	○			
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

齒の咬耗は、エナメル質のみが擦り減っている状態で、象牙質の露出はない。プロカのⅠに相当する。

四肢骨では、左右肩甲骨片、左右上腕骨、右尺骨、右桡骨、左右脛骨、右腓骨、左右寛骨片が保存されている。左上腕骨は、骨頭が破損し、骨表面の風化が激しい。右上腕骨は、骨表面の風化は少ない。三角筋粗面の隆起は特に認められず、骨体が細長く直線的な印象である。

右尺骨は近位半が残っているが、風化による傷みが激しい。右桡骨は近位部が断片的に残っている。骨頭の大きさは普通である。脛骨は、左は上端が破損し、右は遠位半が残っている。骨体の大きさは男性として平均的である。右腓骨の特徴は脛骨に準ずる。寛骨は大坐骨切痕付近が左右とも保存され、切痕の湾入は鋭角である。

その他に、胸椎（2点）と腰椎（4点）が検出されている。椎体には加齢による辺縁部の骨棘形成もみられない。

この人骨の性別は、頭蓋の形態的特徴や四肢骨の太さや長さから男性と思われる。年齢は、壮年の初期と推定される。

第4号墓

保存されている人骨は、頭蓋では右側頭骨、四肢骨では右大腿骨骨体片、上腕骨片、桡骨片である。側頭骨乳様突起は破損しているが、周辺付近は頑丈である。外耳孔は、きわめて大きな橢円形である。保存されている四肢骨の骨表面のほとんどは風化による傷みが強い。そのため四肢骨の骨体が、本来の太さや頑丈さより、細く華奢になっていると思われるが、それを考慮しても太いほうである。したがって、当土坑より出土した人骨は、男性の可能性が高い。年齢は、齒が残っていないため、成人としかわからない。

第5号墓

頭蓋、左右上腕骨、右桡骨、左右尺骨、左右大腿骨、左右脛骨が比較的良好な保存状態で残っている。

頭蓋は、顔面および頭蓋底が破損している。頭蓋形は、頭頂骨などに部分的に破損があるために不明である。前頭骨は、眉間や眉弓が顯著に隆起している。縫合は、基本的には開いているが、矢状縫合の一部に癒合箇所が認められる。外後頭隆起が認められる。周辺の上項線と最上項線がつくる隆起が明瞭である。外耳

孔は小さい楕円形である。下顎骨は、下顎枝は狭いが(27)、骨体が高く頑丈である。また、正中部のオトガイ隆起およびオトガイ結節が発達し、明瞭なオトガイ三角を形成している。歯の保存状態は以下の通りである。

7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7
7	6	5	4	3				1	4	5	6	7		

咬耗程度は、一部に象牙質が露出している箇所が認められるので、プロカのⅠ～Ⅱに相当する。

上肢骨は、右側が比較的良好に保存されている。骨体の太さは江戸時代人男性の平均以上である(右上腕骨:体最小径20/体最大径22、右桡骨:体矢状径13/体横径17、右尺骨:体矢状径11.5/体横径17)。上腕骨の三角筋粗面は隆起し、桡骨粗面は広い。さらに、尺骨と桡骨の骨間縫が良く発達し、生前の筋肉の良好な発達がうかがえる。下肢骨は、大腿骨は両端が破損し、骨体の中央部が残っている。骨体は直線的で、湾曲は弱い。後面の粗線の隆起が顕著であるが、付柱は形成していない。脛骨は遠位半が保存されている。骨表面が粗造で、多数の小孔が認められる。大腿骨および脛骨は、江戸時代男性の平均以上の頑丈さである(右大腿骨:体中央矢状径29/体中央横径28、右脛骨:中央最小径22/中央横径31)。左右の距骨が残っているが、滑車面が部分的に破損し、蹲踞面の観察は不可能である。

以上のことから、この人骨の性別は男性と思われる。年齢は、歯の咬耗から壮年初期と推測される。

第6号墓

出土状況図面から判断すると、中央付近の頭蓋骨に代表される人骨1体が、方形木棺に埋葬されていたようである。しかし、出土人骨を詳細に検討すると、3体分の人骨が検出された。

中央付近の頭蓋は、顔面と頭蓋底および頭頂骨の一部が破損している。前頭骨の眉間や眉弓は、破損し観察できない。縫合は、外板では矢状縫合の一部は癒合消失している。内板では縫合が完全に消失し、静脈溝の圧痕が深く明瞭である。また、左右側頭骨の乳様突起は下垂し、基底部が頑丈である。後頭骨では外後頭隆起の突出はない。下顎骨は、下顎枝が大きく破損している。咀嚼筋の発達程度は不明である。下顎体は高く頑丈で、オトガイ隆起やオトガイ結節も顕著である。歯の保存状態は次の通りである。

3	2	1		1	3
X	X	6	5	4	000

×は生前脱落、歯槽閉鎖

歯の咬耗程度は、一部に象牙質の露出が認められる。プロカのⅠ～Ⅱに相当する。

この、頭蓋骨に代表される人骨の四肢骨の両端が破損し、骨体部分しか保存されていない。上腕骨の三角筋粗面は明瞭であり、太さも江戸時代男性として平均的である(左上腕骨:体最小径17/体最大径20)。大腿骨の骨体の大きさは、江戸時代男性平均よりやや太い(右:体中央矢状径25/体中央横径26、左:体中央矢状径26/体中央横径27)。脛骨の骨体は扁平である(示数70、最小径21/最大径30)。

別個体では、頭蓋の左側部分のみが出土している。前頭骨から側頭骨、さらに下顎骨が検出された。前頭骨は外板部分では前頭縫合が残存しているが、内板では消失している。前頭縫合およびラムダ縫合においても同様である。側頭骨乳様突起は大きく、乳突上稜も良く発達している。下顎骨枝は広く(37)、下顎角は大きく外反し、咀嚼筋が良好に発達していたと推測される。歯の保存状態は以下の通りである。

7	0	X	X	X	X	X		X	X	X	O	O	O	X
											3	4	5	X

生前に抜け落ちた歯が多く、歯槽骨が退縮している。残っている歯の咬耗程度は、象牙質が露出しており、プロカのⅢに相当する。

さらに、3体目では、下顎のオトガイ周辺がわずかに残っている(中央やや北寄)。下顎歯は生前に脱落し、歯槽骨が大きく退縮し、外側ではオトガイ孔、内側ではオトガイ棘をかろうじて確認できる。

この土坑墓より出土した人骨は、合計3体である。性別はすべて男性で、年齢は壮年前半、熟年、老年と

思われる。

第7号墓

頭蓋、左右大腿骨、左右脛骨、右上腕骨、左尺骨が保存されている。その他に細かい骨片が多数出土しているが、部位の同定是不可能である。

頭蓋は、頭蓋冠と左右錐体が残っている。頭蓋は類五角形で短頭に属する（頭示数91.3：最大幅147／最大長161）。右眉弓の隆起は良好に発達している。冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合とも、内板では完全に癒合消失している。外板でも一部に癒合が始まっている。頭頂結節は明瞭である。側頭骨の乳様突起は、破損しその形状の観察ができないが、乳突上稜は隆起している。外耳孔は大きな楕円形である。外後頭隆起は突出していないが、上頸線と最上頸線のつくる隆起が明瞭である。

歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

6 5 4	1 2 3 4 5 6
6	6 7

咬耗程度は、エナメル質のみがすり減る程度であり、プロカのⅠに相当する。下顎左第2大臼歯の齶部遠心にC3のカリエスがある。

右上腕骨は、骨体の近位半が残っている。三角筋粗面は大きく、明瞭である。左尺骨の骨頭は大きい。大腿骨は、右が骨体の近位半（土坑南西）と左が骨体上部12cm（頭蓋南西隣）程度残っている。後面粗線の隆起が顎頭であり、骨体の太さは江戸時代男性としてほぼ平均的である（右：体中央矢状径26／体中央横径26、左：体中央矢状径26.5／体中央横径26.5）。左右脛骨は骨体の遠位半が保存され、右脛骨の骨表面は風化している。左骨体の太さは平均的で（体最小径22／体最大径29.5）、扁平脛骨ではない。左右距骨は一部が破損している。蹠屈面は形成されていない。

この人骨の性別は男性と思われる。年齢は、縫合の癒合が進んでいるが、歯の咬耗は比較的少ないので、壮年前半と思われる。

第8号墓

頭蓋、左右四肢骨が断片的ではあるが保存されている。

頭蓋は、前頭骨から頭頂骨および側頭骨そして後頭骨が残っている。一部に破損があるため頭蓋形はわからない。前頭骨の眉間や眉弓の隆起が明瞭で、鼻根部の陥入は強い。縫合は内板では完全に癒合消失し、外板では半分以上が消失している。内板では、クモ膜颗粒小窓が多数認められ、さらに静脈溝が顎著である。側頭骨の乳様突起は大きく下垂する。乳突上稜は特に明瞭に隆起している。外耳孔は、大きな円形である。外後頭骨の外後頭隆起は突出しているほうではないが、上頸線や最上頸線の形成する隆起帯が明瞭である。

歯の保存状態は次の通りである。

2 1	4 5 6 7
3	1 2 5

咬耗程度は、象牙質の露出が部分的に認められる。プロカのⅡに相当する。

上腕骨は、右（土坑北西際）骨体中央部と、左（頭蓋東隣）骨体遠位部が残っている。右上腕骨は、太さが江戸時代男性平均で（体最小径17／体最大径22）、三角筋粗面も明瞭である。右尺骨（土坑最西北）と右橈骨（頭蓋東寄下）は骨体中央部が残っており、骨間縫の発達が良好で、骨体も太い（右尺骨：体矢状径14.5／体横径17、右橈骨：体矢状径13／体横径17）。左右大腿骨は、右大腿骨（頭蓋西北の北側）では下端以外の大部分が保存され、左大腿骨（土坑南東）では近位半が保存されている。右大腿骨の太さは江戸時代男性の平均値にほぼ近く（体中央矢状径27／体中央横径26.5）、骨壁も厚く、頑丈である。大腿骨頭部も太い。後面粗線は隆起し、明瞭であるが、付柱の形成はない。右脛骨（頭蓋西北の南側）と左脛骨は、近位部が破損し遠位部が残っている。骨間縫の発達は良好で、下肢の筋肉の発達が良好であったことがうかがえる。骨表面は粗造で、小孔が多数あり骨肥厚がある。右距骨（断面図頭蓋左隣）には蹠屈面の形成は認められない。出土人骨の性別は男性と思われる。年齢は、歯の咬耗から判断すると壮年半ば程度と思われるが、頭蓋の

状態から壮年後半と推測される。

第3項 考察

当遺跡から出土した人骨について下の通りまとめた。

墓番号	個体数	性別	年齢
1	1	男性	壮年半ば
2	1	男性	壮年半ば
3	2(北)	男性	壮年初期
	(南)	男性	壮年初期
4	1	男性	成人
5	1	男性	壮年初期
6	3	男性	壮年前半
		男性	老年
7	1	男性	壮年前半
8	1	男性	壮年半ば

合計11体の人骨が検出された。全て成人男性で、女性あるいは乳幼児などの未成年の骨は検出されなかった。人骨の計測値は、江戸時代男性平均値とほとんど差異はない、形態的特徴も江戸時代人骨と一致する。したがって、当遺跡の人骨は江戸時代のものとして問題はない。3号北側人骨には、貧血に関係のあるクリブラ・オルビタリアが確認できたが、それ以外に骨に現れる疾病的痕跡は認められなかった。なお、全般に縫合の癒合消失具合に比べ、歯の咬耗が軽度であるのが特徴的である。

これらの墓群は、成人男性ばかりの埋葬であることから明らかに家族墓ではない。墓域の出土状況から2つの集団に分けられるが、このことが地域性によるものか、あるいは埋葬人骨の身分によるものかは人骨の特徴からでは判断出来ない。当地域において、江戸時代の人骨がまとめて出土した例はなく、「埋葬」を考えるうえで貴重な資料であるが、今後の資料の増加を特に期待したい。

(国立科学博物館人類研究部 梶ヶ山真里・馬場悠男)



第3号墓出土頭蓋骨上面観



第3号墓出土頭蓋骨側面観



第3号墓出土下頸骨



第3号墓出土頭蓋骨前面観



第7号墓出土頭蓋骨前面観



第7号墓出土頭蓋骨上面観



写真1 安楽寺東遺跡出土人骨

第2節 考古学データと民俗例に基づく埋葬方法の復元と変遷

第1項 埋葬方法の復元

本遺跡からは、近世を主体とする2群合計8基の墓が検出された。そこでこれらの墓およびその内部からの遺物出土状況と、文献に記述されている近隣地域の伝統的な埋葬方法と併せ、まずその埋葬方法について復元したい。

(1) 棺の種類

安楽寺東遺跡の各墓は第4号墓壙を除き、いずれも方形である。また多くのものからかなりの数の釘が出土しており、このことからこれらの棺は丸形の桶ではなく釘を使って組まれた四角いものであったと一応推測することが可能であろう。

一方、民俗調査では、

- 1) この地域のお棺形式は四角であったとされている〈大月市〉。(山梨県教育委員会1985: 82)
- 2) 組合の者の手で製作され、普通二尺四寸四分(約74cm)横一尺四寸(約32cm)の立棺であるが、実際には規定よりも大きく作ることが多く、棺の蓋は三隅だけ釘づけにする〈神奈川県津久井郡〉。(鈴木1933)
- 3) 棺のふたは載せておき、出棺当日に石でたたいて釘付けにする〈上野原町〉。(上野原町誌刊行委員会1975: 872)
- 4) 昔は桶は高価なので、葬式組の大工が松や杉などで作ったタチカン(立棺)を使う〈富士吉田市上墓地〉。(堀内1986: 21)
- 5) 桶は高価なのでミマイット(見舞い人)の大工が松や杉材で四角形の箱型に製作したタチカン(立棺)で、蓋は石を使って釘でうちつける。〈富士吉田市下吉田〉。(堀内1990: 75・78)

といった例を見ることができる。これらからも棺は桶ではなく、四角形の立棺で釘が使われていたと判断することができる。ところで、東京都多摩ニュータウンNo.335遺跡では桶を使ったと考えられる墓から釘が出土する例が報告されており、釘の存在だけで棺桶の形式を断定するには注意が必要なようである。ただしこの墓壙は円形で桶の形と整合していることから、総合的に安楽寺東遺跡の墓壙では棺が使われていたと判断できよう。

(2) 被葬者の姿勢

被葬者はどのような姿勢で埋葬されていたのであろうか。発掘調査の結果出土した人骨のうち良好な状況をとどめているものは脛骨・大腿骨の両下腿骨が穴の両側寄りに折り曲げられたように垂直に立ち、その間に頸蓋骨が落ち込むように出土している。また上腕骨や尺骨、桡骨などの上肢骨が下腿骨の内側に落ち込んで出土している。こうした検出状況から、やや足を括げた立て膝で腰を下ろし、手は足の間に入れて組ませた姿勢で埋葬されたと考えられるものがある。また第3・5・8号の各墓では骨の出土位置から、体の前面は川の方角(南方向)に向かって座らされていたと判断できる。こうしたいくつかの事例から推測すると、各人はおおむね同じ姿勢で納棺されていたと思われるが、両足の間隔が一部で若干異なっているものもある。

一方民俗例では、

- 1) 立棺の場合、顔を南向きする〈都留市与綱〉。(小松1989: 470)
- 2) 死体は死後硬直によって納棺できない場合があるので、死後それぞれの関節を一度ずつ折り曲げておく〈富士吉田市上墓地〉。(堀内1986: 18)
- 3) 死者は死後硬直するのであぐらをかいた状態にしておき、立棺の場合はあぐらをかいた姿勢で納める〈富士吉田市下吉田〉。(堀内1990: 75・76)
- 4) 死体は死後しばらくすると硬直して動かせなくなるので、膝を折り曲げて縛っておく。そして入棺時には膝をかかえた姿で納める〈富士吉田市上吉田〉。(堀内1989: 118)

のだという。

これらの例からは、座棺の場合でも、あぐらをかいた状態で納める場合と、膝をかかえた姿で納める場合

の二種類があったことが知られる。安楽寺東遺跡の墓では上記のように両足の間隔が若干異なる例があるが、これは足を紐などで縛り閉じた状態で納められたものが紐の腐朽や土圧等でいつの間にか足が広がってしまったのか、それとも元来立て広げた状態で納められたのかのどちらかと推測される。また手は多くは膝の前後で組ませてあったのである。なお、死者の頭部に関しては「頭を北に顔は西に向けるもの」(鈴木1933)という記述もあるが、この記述が寝棺と座棺のどちらを念頭に置いているのか不明であるため本遺跡の事例と直接対応させるのは難しい。ただし都留市の民俗例と本遺跡例とは一致している。

(3) 被葬者の服装

安楽寺東遺跡例では死者の服装を窺わせるものはほとんどなく、第3号墓で出土している銅製の足袋コハゼ2枚が服装に関する唯一の遺物である。のことからこの第3号墓の中央人物が足袋を履いていたことがわかるが、民俗例からも死者の服装を見てみたい。

- 1) 左袴にして経帷子をつけ、脚絆・草鞋で身を固める。足袋は左右を違えて履かせる(神奈川県津久井郡)。(鈴木1933)
- 2) 白装束の経帷子を左前につけ、足袋は左右反対に履かせる。またさらし木綿で作った手っ甲・脚絆をつける(上野原町)。(上野原町誌刊行委員会1975: 872)
- 3) 緯糸・手甲・脚絆(都留市中津森)。(小松1989: 467)
- 4) ヒトエモノ(経帷子)の上にオイズリを着せ、腰巻などもつける。またコウガケ(手甲)をつけ、ワラジ・ハバキ(脚絆)を履かせる(富士吉田市上暮地)。(堀内1986: 20・21)
- 5) ヒトエモノ(経帷子)・オイズリ(笈摺)・手甲・脚絆・足袋・ジバン(緒糸)・腰巻・ワリンドシ・メカクシ(額に縛る三角形の白布)(富士吉田市下吉田)。(堀内1990: 75)
- 6) 足袋を左右逆に履かせる(塩山市)。(杉本1998: 679)

などという。これらからは足袋は死装束の一つとして履かされていたことがわかるが、安楽寺東遺跡例では上述のように一つの墓を除きコハゼは出土していない。このことは腐食等による消滅の可能性を排除できれば、民俗例よりも古い時代では足袋を履かせることは一般的ではなかったことを示す可能性がある。

(4) 副葬品

安楽寺東遺跡の8基の墓から出土した人骨以外の遺物のうち釘や棺金具およびコハゼを除けば、錢・キセル・盃・眼鏡・薬瓶・数珠の可能性がある玉などがあるが、これらは基本的に故人に対する副葬品と見ることが可能であろう。

民俗誌の中から副葬品に関する記述を拾ってみると、

- 1) 数珠・血脉・六文銭(極楽通宝と六つ印刷した紙片)などを入れた頭陀袋を首にかける(神奈川県津久井郡)。(鈴木1933)
- 2) 頭陀袋・草鞋・死者愛用の杖・酒・タバコ・花・六文銭(上野原町)。(上野原町誌刊行委員会1975: 872)
- 3) 六文銭・クルミ・小糠を入れたズタブクロを首にかけ、眼鏡・杖など身近な持ち物、シカバナや菊などの生花(富士吉田市上暮地)。(堀内1986: 21)
- 4) 六文銭・米・塩などを入れた頭陀袋を首に下げる。(富士吉田市下吉田)。(堀内1990: 76)
- 5) 五十銭銅貨を入れたズタブクロを首に下げ、死出の旅路の道具として笠や杖を入れる(富士吉田市上吉田)。(堀内1989: 118)
- 6) 紙にお金の絵が書いてあるものを入れたズタブクロ・杖・花・眼鏡や財布など死者にとって大切なものなど旅立ちですぐ使うもの(白根町)。(浅野1996: 167)

といった内容が上げられ、服装とも併せ、死出の旅路のための道具という認識がかなり強い。そしてこれらの地域民俗例と発掘調査で出土した副葬品の内容とはほぼ一致しているといつてよいであろう。

ただし気にかかるのは副葬品がまったく出土しなかった墓もかなりあるという点で、これらの墓からまったく副葬品が出土しなかった理由が何であるのか、もう少し検討する必要があるように思われる。

(5) 遺 葬

検出された 8 基の墓のうち 6 基では埋葬人物は一人であったが、第 3 号墓では 2 人、第 6 号墓では 3 人の人骨が出土している。このうち前者では発掘時にも明瞭に追葬の様子が確認でき、後者では南壁際に置かれた下肢骨が先に埋葬された人物の骨の一部であると見られ、両者共に先の被葬者の人骨を片づけて別の人物を埋葬した様子が窺われる。残念ながら同一墓内に埋葬された人物間の血縁関係について形質的に言及することはできないものの、被葬者は第 3 号墓では両者共に 30 代くらいの壯年男性、第 6 号墓では 30 代・50 代・50 代後半以上のいずれも男性であることが判明しており、おそらく親子または兄弟のように密接な関係を持っていたと推測できるであろう。また 8 基の内の 2 基のみでこうした追葬が確認できることは、追葬は一般的なものではなく、特定の場合に限って行われたものであることが認められるであろう。

なお、民俗誌では追葬に関する記述は少ないが、都留市与縄では屋敷墓の掘り返しを行った際に古い骨が出てくると再び新棺の脇に埋め戻すとされており（小松 1989：470）、出土状況から考えて本遺跡でもこうした行為が行われたと考えられよう。ただし掘り返しによっても墓壙の形態がまったく乱れていないことから、結果として追葬になったのではなく、当初から墓の位置を意識して掘り返したのだと見ることが可能であると思われ、のことからもこれらの人骨間には何らかの強い血縁関係があると推測される。

(6) 埋葬場所

安楽寺東遺跡の墓は 2 群に分かれているが、付近からは住居など建物の柱穴などを確認することはできず、埋葬当時もこの場所は畠であったと見ることができよう。このように畠の一角に埋葬することは現在ではほとんどの見られなくなったようであるが、「古くは屋敷繞きの畠の隅とか、家にとって大切な畠地の隅などを選んで埋葬することが普通であった」という（後藤 1979：33）。しかしながら「明治になって墓制が制定されて、共同墓地に葬ることが義務づけられ、それまで個々の畠などに散在していた墓を共同墓地に移した例もある」（後藤 ibid：33）という全体的な概況と、都留市平栗では「明治 8 年頃、共同墓地になるまでは、家の裏や畠の一角に墓があり、そこに棺を埋めていた」（小松 1989：476）といった近隣事例から、第 4 号墓の掘り返しがこうした改葬のためである可能性はかなり高いといえよう。また堀内真氏のご教示によると、畠の中に墓を作る意図についてはその土地を売らずに維持すべしというメッセージ性を帯びているという。

(7) 被葬者の特徴

以上のように見てくると、所有する畠の一角に埋葬された人が家族の中でどのような人物であったのかが問題となる。前節で述べられているように、これらの墓の被葬者は大変特徴的な事実は、被葬者がすべて成人男性であったということである。このことは畠内の墓に葬る人物にはきわめて厳格な約束があったことを意味している。こうした場所の墓が上述のように強いメッセージ性を帯びているとすれば、それを指示できる人物、また死後もそれを自ら体現させる意味でこうした場所に埋葬される人物としては、戸主など一家の中での中心人物である可能性が高いと推測されよう。一群の墓の形成時期がある程度把握できる第 1 ～ 4 号墓では、江戸時代末期から大正時代にかけておよそ 60 年間ほどの間に 5 人の人物が埋葬されたことになる。梶ヶ山氏のご教示では直系家族の場合、平均的には 30 年に一人程度の割合で代替わりするということであり、そうした予測からすると 5 人という被葬者の数は被葬者の年齢がいずれも壮年半ば以下（40 歳以下）とかなり若いことを考慮しても多い感じがする。こうした見方に基づけば、こうした畠内墓地に埋葬される人物は単純に戸主といった特定人物だけではなく、それに準じるような男性も埋葬されたのかも知れない。

また、畠内墓地に埋葬される人物が限定されているということは、裏を返せば別の場所に女性や子供などは墓を持つということを示している。その場所を特定することはできないが、一家族が二ヶ所以上に墓地を持つということになるわけで、憶測をたくましくすれば、こうしたことは埋め墓と抨み墓からなる両墓制と関係するのかも知れない。

なお、考古学的データと民俗誌データの両者から、第 5 ～ 8 号墓の埋葬状況を共時に復元・図化したものが第 18 図である。

第 2 項 山梨県東部地域における近世後半以降の埋葬方法の変遷

さて、安楽寺東遺跡での近世から大正時代にかけての埋葬方法は以上のように復元されようが、ここでさ

らに本地域および近隣の他遺跡での調査事例も併せ、近世からの墓制の変遷について若干の予察を行っておきたい。

上述してきたように、本遺跡では大正時代と考えられる第4号墓が短長方形である以外は、近世後半以降いずれも方形の墓壙を持ち座棺であったと考えることが可能である。またこのことは周辺地域の民俗事例からも裏付けられる。民俗誌によれば富士吉田市下吉田での座棺から寝棺への移行は大正頃とされ（堀内1990：76）、一方では昭和になってから寝棺が使われるようになったともいう（後藤1979：16）。おそらく第4号墓の墓壙形態はこうした埋葬姿勢の変化を示していると思われる。また昭和2年の新聞記事では甲府市でこの時期に土葬が4割にまで減っていることと、その禁止を徹底するための規定作成と取り締まり方法を検討中であることを伝えており（山梨日日新聞社1927）、土葬の風習自体がこの頃までにかなり減りつつあったといえる。なお、北都留地域ではこの他、都留市の九鬼Ⅱ遺跡でおそらく古寛永銅銭2枚・新寛永銅銭4枚（非文銭）からなる副葬銭が出土した方形座棺の墓が1基検出されており（山梨県教育委員会1996）、18世紀代のものである可能性が高い。またやや地域が離れるものの塩山市の伊保水遺跡では18世紀後半から19世紀にかけての墓が19基確認されており、これらの墓壙の形態は、長方形に近いものが4基、円形が9基、方形が4基、円形か方形か区別のつけがたいものが1基、不明1基と円形のものが卓越しており、また円形の内の1基では桶の痕跡が明瞭に残っていたという（山梨県教育委員会1998a）。このことから類推すると円形のものは桶であった可能性が高いと思われ、この時期には円形墓壙・桶棺が主体であったが、方形のものも若干は存在していたようである。

ところで、甲斐国東部（山梨県北都留地域）に隣接する武藏国南西部（東京都多摩地域）での近世墓壙の調査では、近世（17世紀後半）以降近代に至るまでの墓壙の形態は、長方形・隅円長方形（17世紀後半～18世紀初頭）→方形・不整形（18世紀前～中葉）→円形・不整円形（18世紀後葉～明治初頭）→方形（近代）→寝棺（戦後）、という変遷をたどること。そしてこの変遷は、仰臥（側臥）屈葬→方形棺→桶棺→座棺→寝棺という埋葬形態差に起因する可能性が高いと考えられている（長佐古1997：126～127）。こうした過程は上述の山梨県東部地域の流れとおむね共通していると見ることが可能であろうが、本地域では特に円形墓壙・桶棺から方形墓壙・方形棺への変遷過程に不明点がまだ多く、また若干異なる経過をたどっている可能性もある。今後の調査事例の増加を待って改めて検討する必要がある。

以上をまとめると、山梨県の東部地域では18世紀後半から19世紀にかけては円形墓壙・桶棺が主体であったがある程度方形のものもあり、それが江戸末期以降、方形墓壙・方形棺がほとんどを占めるようになる。これが大正から昭和頃にかけて寝棺に変わり、また寺などの共同墓地に埋葬されるようになるが、土葬自体も昭和になって以降はかなり減った、という変遷が予想される。

(小林)



第18図 第5～8号墓の埋葬状況復元図

第3節 出土人骨の炭素・窒素同位体比法による食性分析

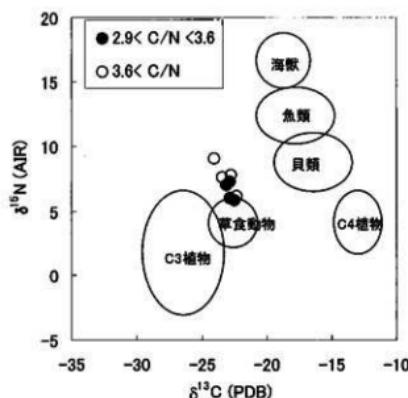
第1項 はじめに

山梨県大月市安楽寺東遺跡より出土した人骨試料について、骨試料含有コラーゲンを抽出してその炭素および窒素同位体比を測定した。その結果から、当地域における近世の食生活を考察することが本研究の目的である。人骨試料に含有されるコラーゲンの炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$ 値) よりも窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$ 値) は、その個体が生前に摂取したタンパク質の炭素・窒素安定同位体比と一定の関係をもっているため、その特徴から分析試料である骨の持ち主が、一般的な植物である C₃ 植物からタンパク質を得ていたのか、それともアワ・ヒエ・キビなどの雑穀 (C₄ 植物) も利用していたのか、また海産物を多く摂取していたのかどうか、そのような事柄について、ある程度、定量的な議論が可能である。これは、天然の食料資源における同位体比の特徴を利用したもので、陸上の動物や植物は比較的低い炭素・窒素同位体比を示すのに対し、海洋にむすむ動物は炭素・窒素とともに比較的高い同位体比を示す。特に海洋生態系では食物網 (複雑な食物連鎖) が多段階にわたるため、貝類、魚類、大型海獣で窒素同位体比が大きく異なることが特徴的である (第19図)。

近年の分析技術の進展は目覚しく、非常に少量の試料で様々な化学分析が可能となり、従来では分析することが困難であった貴重な学術試料についても、分析が現実的になっている。本研究では、安楽寺東遺跡から出土した近世・近代人骨試料について、肋骨など形態人類学の情報が比較的少ない部位から 0.5~1 g の骨片を採取し、残存するコラーゲンを抽出・精製して分析に供した。直接、人骨試料を分析することによって、従来の考古学的な手法では推定が困難であった食生活における個体差や社会性などを明らかにできる可能性がある。

第2項 試料と方法

本研究では、安楽寺東遺跡より 1998 年に発掘された人骨試料のうち 9 個体から分析試料を採取した。試料は肋骨など形態学的情報が比較的少ない部位を使用している。実際の同位体分析は外部からの有機物混入の影響を避けるために、骨組織の主要なタンパク質であるコラーゲンを対象とする。炭素・窒素安定同位体比および炭素・窒素含有量は、元素分析計と安定同位体比質量分析計を連結した EA-IRMS システムを使用した。



*黒丸は純成作用の影響が少ないものを、白丸は純成作用の影響の大きいものを示す

第19図 コラーゲンの分析結果から復元した安楽寺東遺跡人の摂取したタンパク質における炭素・窒素安定同位体比

約 0.3 mg のコラーゲン試料を元素分析計で燃焼したのち、二酸化炭素と窒素の安定同位体比を逐次的に測定している。典型的な測定誤差は、測定用標準物質 (working standard) として再均質化した試薬コラーゲン (COLLAGEN Insoluble Type 1, Sigma Chemical) をサンプル測定間に適宜挿入することで評価したこと、1 標準偏差が $\delta^{13}\text{C}$ 値で 0.1‰ 以下、 $\delta^{15}\text{N}$ 値では 0.3‰ 以下である。炭素・窒素安定同位体比は非常に小さな変異しかもたないため、標準となる物質に対する相対的な変動を千分率で表すことが慣例となっており、これを δ (デルタ) 値と呼ぶ。 $\delta^{13}\text{C}$ 値は PDB (PeeDee層出土ペレムナイト化石)、 $\delta^{15}\text{N}$ 値は AIR (大気中窒素) を基準としている。安定同位体比分析の詳細については別紙を参照されたい (米田 1999 a、1999 b)。

第3項 結果と考察

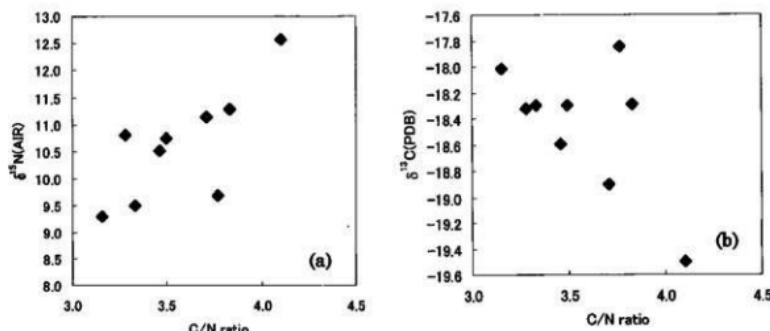
各コラーゲン試料における炭素・窒素質量含有率、C/N 比、 $\delta^{13}\text{C}$ 値、 $\delta^{15}\text{N}$ 値を第 2 表に示す。コラーゲンは植物に由来する土壤有機物 (フミン酸等) と比べ

第2表 安楽寺東遺跡出土人骨のコラーゲンにおける窒素同位体比、炭素同位体比、炭素含有量、窒素含有量、および元素数の炭素/窒素比

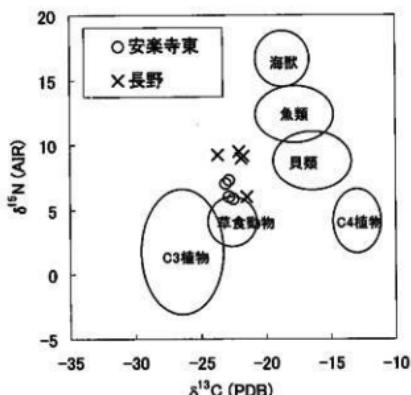
SAMPLE		$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	C (%)	N (%)	C/N
安楽寺東-1	第1号墓	11.1	-18.9	43.5	13.7	3.7
安楽寺東-2	第2号墓	11.3	-18.3	42.0	12.8	3.8
安楽寺東-3	第3号墓南	10.8	-18.3	44.2	14.7	3.5
安楽寺東-4	第3号墓北	10.8	-18.3	44.0	15.6	3.3
安楽寺東-5	第4号墓	12.6	-19.5	40.2	11.4	4.1
安楽寺東-6	第5号墓	9.5	-18.3	43.0	15.0	3.3
安楽寺東-7	第6号墓	10.5	-18.6	42.6	14.4	3.5
安楽寺東-8	第7号墓	9.7	-17.9	41.6	12.9	3.8
安楽寺東-9	第8号墓	9.3	-18.0	44.8	16.6	3.2

ると窒素の含有量が多い、という特徴を有するため、C/N比は抽出物の精製を確認する上で重要である。経験的に原子数のC/N比が2.9~3.6に分布する場合は、抽出物がコラーゲンであると考えて問題ないといわれている。この範囲から外れる場合は、コラーゲンが著しく劣化しているか、あるいは外部由来の有機物などが混入している危険があり、分析結果を解釈に使用しない方が安全である。今回分析した試料では、安楽寺-1、-2、-5、および安楽寺-8が先述の範囲から外れており、食生活に関する解釈からは除外することにした。したがって、C/N比が2.9と3.6の間の値を示した5個体について生前のタンパク質源について考察する。

コラーゲンには炭素、窒素とともに重たい同位体 (^{13}C , ^{15}N) が濃縮する。その値は、動物実験や野生動物に関する研究から、食物中のタンパク質とコラーゲンの同位体比に強い正の相関があることがしられており、 $\delta^{13}\text{C}$ 値では4.5‰、 $\delta^{15}\text{N}$ 値では3.5‰程度の濃縮が報告されている。この値をもちいて復元した食性における炭素・窒素同位体比を第19図に示す。あわせて代表的な食物資源における炭素および窒素同位体比を示すことで、各個体が摂取してた食料のおおまかな傾向を知ることが可能である。黒塗りの円シンボルで示した個体はC/N比が妥当な値を示したものであり、白抜きの円シンボルの個体はC/N比よりコラーゲンの変質（統成作用という）の可能性が示された個体である。両者の区別無く炭素・窒素安定同位体比の分布をみてみると、二つの値に負の相関関係が認められるが、かならずしも統成作用の程度と同位体比には関係が認められない。しかしC/N比と炭素・窒素同位体比とのそれぞれの関係を見ると（第20図）、両者には何らか関係がある可能性が指摘できる。したがって、炭素と窒素の間に見られた負の相関は摂取した食物のばらつきに起因すると考えるよりも、統成作用の程度の違いに起因すると考えた方が妥当なようである。コラーゲンにおける統成作用についてはまだ不明の点も多く、今後さらに検討を加える必要がある。



第20図 C/N比と炭素同位体比（a）および窒素同位体比（b）の関係



第21図 安楽寺東遺跡人骨と長野県歴訪地方出土人骨の食性の同位体比における比較

つづいて、統成作用の影響が比較的すくないと考えられる5個体（安楽寺-3、4、6、7、9）が示した食性について考えてみたい。比較の為に同じく近世の長野県から出土した人骨試料における炭素・窒素同位体比を示した（第21図；米田ほか1996）。安楽寺東遺跡の個体群は全体に窒素同位体比が低い傾向を示している。これは安楽寺東遺跡の個体群にくらべて長野県出土人骨群が栄養段階の高い食物、すなわち海産物を多く摂取していた可能性が考えられる。一方、安楽寺東遺跡のタンパク質源としては、コメやコムギなどのC₃植物とC₄植物食の草食動物が中心であったと考えられ、海産物やアワ、ヒエ、キビといったC₄植物に属する雑穀類の日常的な消費はなかったものと推測された。雑穀については、一般住民の食生活における重要性がしばしば指摘されるが、今回分析した個体についてはアワ、ヒエなどを常食していた可能性はきわめて低いと考えられる。

第4項 結語

今回は、山梨県安楽寺東遺跡から出土した近世後期から近代の人骨試料をもじいて、当時の食生活を検討した。コラーゲンの炭素・窒素同位体比から復元したタンパク質源からはC₃植物中心の食生活が示唆された。また、長野県から出土した近世人骨では海産物の利用が認められたのに対して、安楽寺東遺跡の個体では海産物を日常的に摂取していた可能性は低いと考えられる。また、雑穀類のうちアワ、ヒエ、キビなどC₄植物に属するものについても、それらが主食として利用された可能性は低いことが明らかになった。長野県と山梨県という共に山間部に立地する地域から出土した近世人骨で海産物利用について地域差が認められた点は非常に興味深い。今後、歴史学あるいは民俗学的な情報を加味し、さらに分析個体数を増やすことで、近世における物流や庶民の生活に関する新しい知見を得られることが期待される。

（国立環境研究所化学環境部 米田 稔）

第4章 まとめ

第1節 繩文時代

先述のように今回の調査範囲内からは縩文時代の遺構は確認されていない。しかしながら南西隅にやや集中して中・後期の土器片や削器、磨石類、打製石斧といった石器が出土している。こうしたことからその北側の地形的な上位面にこの時期の縩文時代遺跡が存在している可能性が推測される。

第2節 古墳・奈良・平安時代

古墳時代の遺構は確認できず、この時代のものと推測される土師器片がわずか1点確認できたに過ぎない。従って古墳時代の内容についてはほとんど不明とせざるを得ないが、西数百メートルの地点に強瀬子の神古墳があり、安楽寺東遺跡の付近に当時の集落もしくは古墳が存在するのかも知れない。

奈良・平安時代の遺構としてはII区の第1・2号の二本の溝があるに過ぎない。このうち第1号溝は少なくともa～fの幅50cm程度の6本の小溝が繰り返し掘られた結果であると見られる。これらの溝は調査範囲外に統一しているためその形状や規模などについては明らかではない。その性格についてもはっきりしないが、一部に小礫によって石敷されたように見える部分もあること、また若干の硬化部分も観察されたので、道である可能性も考えられよう。いずれにしてもこの溝は調査範囲外となる北・西両方向に統いており、この部分に溝以外の遺構が存在している可能性も高いと推測される。

一方、第2号溝についても時期も含めやはりはっきりしない点が多い。掘削場所が地形面の境にあたること、また特に水が流れていた形跡が見られないことから、今のところこの地形面段差をさらにはっきりと画する意図を持って掘り込まれた溝ととらえておきたいが、第1号溝と同様やはり西側に統いており、今後その範囲の調査が実施されれば、その性格についてもより明らかとなると期待される。

第3節 近世・近代

本遺跡で検出された墓から復元される墓制については前章第2節でやや詳しく触れたので、ここでは炭素・窒素同位体比法による食性分析の結果について若干述べておきたい。前章第3節で述べられているように、米田種氏によって9個体の分析がなされた結果、これらの各遺体はかなり近似した食生活を生前数十年の間に亘っていたことが明らかとなった。これらの分析結果が別家系と考えられる2群においてもほぼ共通していることは、おそらく本遺跡のデータはこの地域における近世後半～近代にかけての食生活のスタンダードを示していると考えができるであろう。

これら安楽寺東遺跡出土人骨試料から得られた結果は先述のように、基本的にコメ・ムギが含まれるC₃植物と栄養段階の低い海産物との間に分布している。C₃植物にはアワ・ヒエ・キビなどの穀類が属するので、この地域では基本的にコメないしはムギを主食としていたことが認められる。また海産物については、ほぼ同時代の長野県諏訪郡出土江戸時代人骨よりも窒素の値が低く、それより海産物の摂取量が低かったこと、そして若干はあったものの日常的な摂取ではなかったと考えられている。

一方、明治時代以降の実態であると考えられる民俗例の概要を見てみると、都留市域では主食は「朝と昼はハンメシ（米と麦の混合飯…中略…）、夜はニゴミ（ホウトウ）」であったこと（今越1989：315）。大市域でも若干の地域差があるが朝食は、麦飯・オバク・オネリ、麦・スパク・サツマイモ、栗めし、キビメシ、ベットウ、里芋（山梨県教育委員会1985：23）で、夕飯はニコミウドン、オネリ、ホウトウ、オバク、ウドン、オヤジ（山梨県教育委員会1985：24）とされており、いずれも麦および米を利用した食品が圧倒的に卓越していることがわかる。また日常のオカズについては、都留市域では「味噌、漬物、野菜の煮物」で、「肉や魚が普段の食卓に出ることはめったになかった」し、魚は「エビス講やオモッセに食べ」、「尾頭付きといったが」「サンマか目刺し」であったという（今越1989：322）。大市域では一事例ではあるが、「魚類、肉類は殆ど常食からは遠いもので」、「魚はいわし、ますの切物、さんまも年に1、2度位は食べられ、肉

は馬、犬、兎、熊、猪、鶏、きじ、山鳥等が食べられた」といふ(山梨県教育委員会1964:99)、兩地域とともに魚はめったに口に入らず、その種類もサンマやイワシの目刺しなどの小型魚であったことがわかる。

従って、先述の食性分析の結果とこれらの民俗例とは大変よく一致していると言ふことができる。もちろんコメとムギの比率や魚の種類と頻度、またさらに細かな地域性や階層差といった問題は残されており、より詳細な検討を行う必要があるが、民俗事例に窺われるこの地域の食生活は、さらに少なくとも近世後半(19世紀前半頃)までは遡らせ得るといふことが認められよう。

以上、安楽寺東遺跡から検出された各時代の遺構・遺物について、事実記載および若干の分析・考察を行った。まだまだ不十分な点が多いが、そうした点については今後改めて検討を行うこととしたい。

(小林)

引用文献

- 浅野久枝 1996「第4章 一生」『在家塚の民俗—中巨摩郡白根町一』山梨県民俗調査報告書第3集 山梨県
厚木市教育委員会 1995『東町二番』
- 今越祐子 1989「第2章 日常の消費生活」『都留市史 資料編 民家・民俗』都留市
上野原町誌刊行委員会 1975『上野原町誌(下)』甲陽書房
- 大月市教育委員会 1995『大月市埋蔵文化財包蔵地一覧表・分布図』
- 笠原みゆき 1998『強盛子の神古墳』『山梨県史 資料編1 原始・古代1』山梨県
後藤義隆 1979『山梨県の葬送・墓制』『南中部の葬送・墓制』明玄書房
- 小松 清 1989「第7章 人生儀礼」『都留市史 資料編 民家・民俗』都留市
佐藤八郎校訂 1968『甲斐国志』雄山閣
- 杉本 仁 1998「第5節 死と葬儀」『塩山市史 通史編下巻』塩山市
鈴木重光 1933「神奈川県津久井郡地方」「旅と伝説」第6巻7号 のち「神奈川県津久井郡地方の葬制」として「葬送墓制研究集成第1卷葬法」名著出版1979年刊 所収
- 都留市 1986『都留市史 資料編 地史・考古』
- 長佐古真也 1997「4 近世-現代」『多摩ニュータウンNo.335遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第42集 東京都埋蔵文化財センター
- 堀内 真 1986「3 葬送」「上暮地の民俗-富士吉田市上暮地-」市史民俗調査報告書第5集 富士吉田市
—— 1989「3 葯送」「上吉田の民俗-富士吉田市上吉田-」市史民俗調査報告書第9集 富士吉田市
—— 1990「3 葯送」「下吉田の民俗-富士吉田市下吉田-」市史民俗調査報告書第10集 富士吉田市
山梨県教育委員会 1964『山梨県民俗資料調査報告書(第6集)』
—— 1985『山梨県民俗地図-山梨県民俗文化財分布調査報告書-』
—— 1992『塩川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第70集 山梨県教育委員会
—— 1996『九鬼日遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第118集 山梨県教育委員会
—— 1998 a『伊保水遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第149集 山梨県教育委員会
—— 1998 b『矢坪・談合坂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第151集 山梨県教育委員会
—— 1998 c『大月市御所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第154集 山梨県教育委員会
—— 1999『原平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第160集 山梨県教育委員会
山梨日日新聞社 1927「だんだん土葬は減る 市は火葬獎勵」山梨日日新聞 昭和2年11月13日付記事
米田 稔 1999 a「炭素・窒素安定同位体比に基づく向台貝塚集団の食性復元」『市立市川考古博物館研究調査報告書第7冊 向台貝塚資料図譜』pp.167-172. 市立市川考古博物館
—— 1999 b「アバクチ洞穴遺跡出土人骨試料の放射性炭素年代と同位体食性分析」「アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査略報-1998年の発掘-」pp.32-36. アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査団
——・吉田邦夫・吉永淳・森田昌敏・赤澤威 1996『長野県出土人骨試料における炭素・窒素安定同位体比および微量元素量に基づく古食性の復元』『第四紀研究』35-4 pp.293-303. 第四紀学会

図 版



遺跡遠景（南から）



第 1 号溝全景（南から）

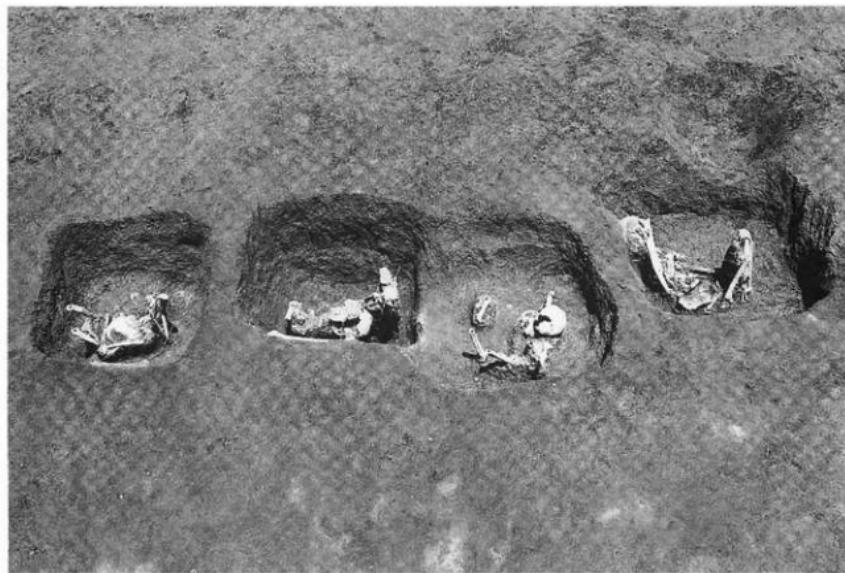


第 2 号溝全景（東南から）

図版 2



第1～3号墓人骨出土状況（南から）



第5～8号墓人骨出土状況（南から）



第1号溝全景（北から）



第1号溝石敷検出状況（南から）



第2号墓人骨出土状況（北から）



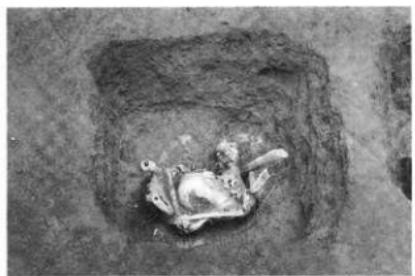
第1・2・4号墓壙（北から）



第3号墓人骨出土状況（北から）



第3号墓壙（北から）



第5号墓人骨出土状況（南から）



第5号墓人骨出土状況（南側面から）

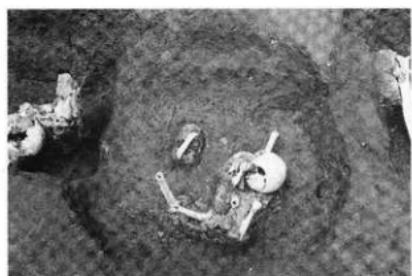
図版 4



第 6 号墓人骨出土状況（南から）



第 6 号墓人骨出土状況（南側面から）



第 7 号墓人骨出土状況（南から）



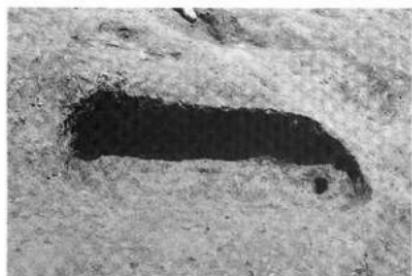
第 7 号墓人骨出土状況（南側面から）



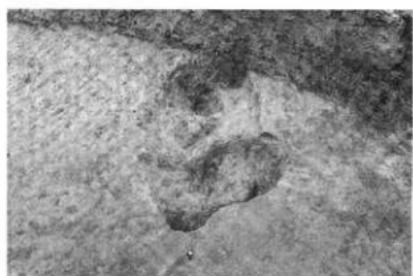
第 8 号墓人骨出土状況（南から）



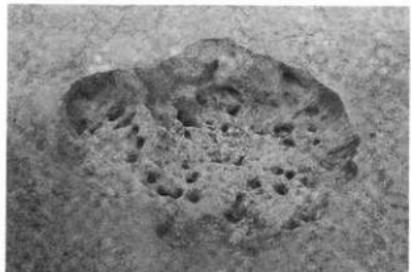
第 8 号墓人骨出土状況（南側面から）



第 1 号土坑（南西から）



第 5 号土坑（南から）



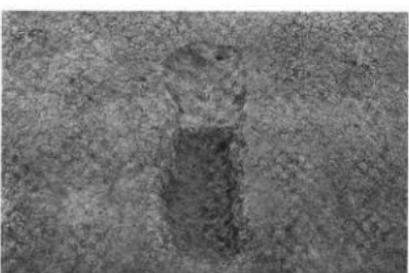
第6号土坑（南から）



第9号土坑（東から）



第10号土坑（南から）



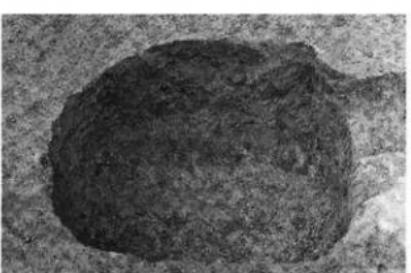
第12号土坑（南から）



第13号土坑（南から）



Ⅲ区全景（東から）

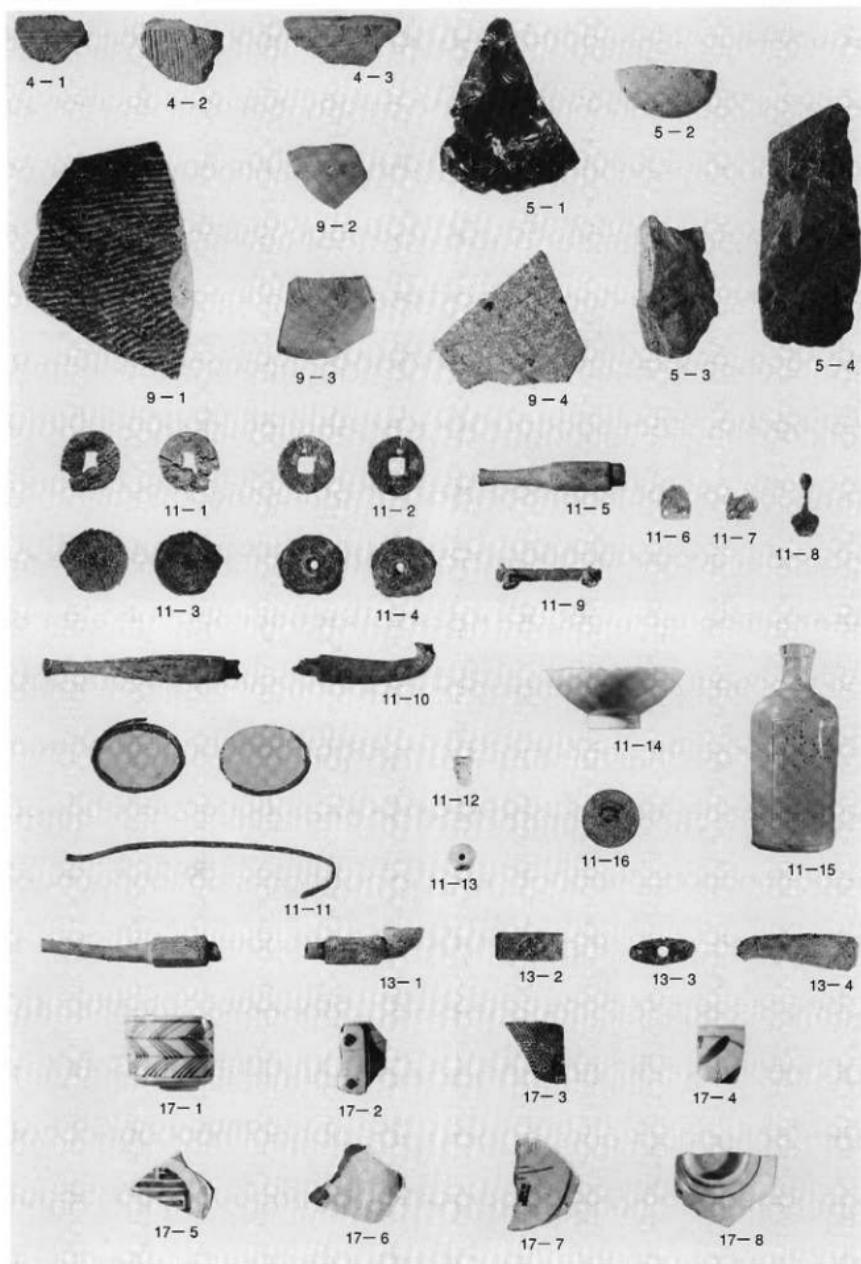


第16号土坑（南から）



第17号土坑（南から）

圖版 6



報告書抄録

ふりがな	あんらくじひがしいせき
書名	安楽寺東遺跡
副題	中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第179集
著者名	小林公治・梶ヶ山真里・馬場悠男・米田穂
発行者	山梨県教育委員会・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎055-266-3016
印刷所	株式会社 ヨネヤ
発行日	平成12年(2000年)3月31日

安楽寺東遺跡概要

ふりがな	あんらくじひがしいせき
所在地	山梨県大月市脇岡町強溝89-1外
25,000分の1地形図	都留
位置	東經138° 56' 38" 北緯35° 36' 19" 標高366m
市町村コード	19206 大月市遺跡番号なし(大月市教育委員会1995未掲載)
調査原因	中央自動車道富士吉田線改築工事
調査期間	平成10年(1998年)5月25日~8月19日
調査面積	2,482㎡
縄文時代中・後期	
種別	散布地
主な遺構	なし
主な遺物	縄文土器(中期・後期)、石器
特記事項	若干の土器・石器が出土。調査範囲周辺の上位地形面に縄文時代遺跡本体が存在か。
古墳・奈良・平安時代	
種別	集落か
主な遺構	溝2条(奈良・平安時代)
主な遺物	土器類・須恵器
特記事項	第1号溝は段丘面を取り巻くように掘削されている。調査範囲西に広がっている。
近世・近代	
種別	墓地
主な遺構	墓塚8基、土坑16基
主な遺物	人骨111体分、寛永通寶、鉄錢、陶磁器類、キセル、釘、棺金具
特記事項	江戸期を主体とし、大正期にかけての所有権内蔵。被葬者は男性で、ほぼすべて座棺で埋葬。また炭素・窒素同位体比による食性分析によりこの時期の食生活が判明した。

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

平成12年(2000年)3月25日 印刷

平成12年(2000年)3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第179集

安楽寺東遺跡

中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書

編 集 山梨県埋蔵文化財センター
 〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923
 電話 055 (266) 3016
発 行 山梨県教育委員会
 日本道路公団東京建設局
印 刷 株式会社 ヨネヤ
 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内一丁目14-6
 電話 055 (235) 4311

